同人誌『まんじ』一〇七号（平成二十年二月一日）～一一七号（平成二十二年八月一日）に十回にわたって掲載した内容をそのまま収録する。

狩谷棭斎讃歌

新井宏

狩谷棭斎讃歌（一）

新井宏

（一）序

狩谷棭斎。森鷗外が評伝を志して書けなかった江戸末期の大学者である。

その棭斎の評伝を書こうと思いたったのは、もう十五年も前の平成四年である。なにしろ計量史の研究を通して棭斎に惚れ込んでいた。坂本守正さん(註1)から「新井さんが書かなくて誰が書きますか」と煽てられ、すっかりその気になって、国会図書館に通っては棭斎の交友関係図や年譜をせっせと作っていた。

しかし、まもなく現実を知る。

さほど有名とは思えなかった「私だけの棭斎」が、調べれば調べるほど巨大に聳えてくるではないか。実証的な学者としては、伊藤仁斎、荻生徂徠、賀茂真淵、本居宣長などの思想家たちをはるかに越え、比肩できるのは新井白石くらいで、清末考証学者の俞曲園が日東第一の学者と称賛していたなどと知るとシュンとなってしまった。

その追打ちとも言うべきものが、平成六年に出された梅谷文夫の『狩谷棭斎』である。生涯を棭斎の研究に捧げた梅谷文夫の学問的な態度は、まさに棭斎そのものであった。「信憑すべき証拠が得られない場合は、判断を留保し、私見をもって真偽を論じない」と言う棭斎の信条そのままに、極めて抑制した記述で、見事に棭斎を描ききっている。

その上更に、梅谷文夫は平成十六年から十八年にかけて、『狩谷棭斎年譜・上下』を出す。九百字詰めで九百ページにも及ぶ詳細極まる年譜。日記を残さなかった棭斎である。私は、世界中で、これほど詳細な個人年譜を

書いた例を知らない。すさまじいエネルギーだ。もう私の出番はない。

梾斎に導かれて成し遂げた私の「古韓尺研究」であった。まだ完成したわけではないが、幾多の幸運に支えられ、基幹的な研究論文を平成十七年までに書き終えた。その上、一般向けの読み物としても、平成十九年の夏『理系の視点からみた考古学の論争点』の一章として紹介することができた。

結局、古代計量史における大問題は梾斎の考証が正しかった。後世、現代の学者達が多くの資料を梾斎に仰ぎながら、「高麗尺」と言う誤りを肥大させてしまったこととの差は何であったのか。それは実証的、合理的な研究過程、すなわち史料批判が最も重要な学問(歴史学)にあって、梾斎から大きく後退してしまったことに他ならない。この現象は現代の考古学にもあてはまるのではないか。梾斎から学ばねばならない。

もちろん梾斎は計量史などというニッチな世界の学者ではない。研究分野は和漢の古典から、制度、博物、計量、銭貨まできわめて幅広い。名書家としても有数である。しかし梾斎の凄さは、何といっても考証、すなわち史料批判という研究態度にあった。

学問とか研究は、得られた結果を言うのではなく、結果を得るプロセスを言う。現代の歴史学が史料批判を最重要視するのはそのためである。いわば日本における真の歴史学の誕生は梾斎と共にあった。それは本居宣長と対極をなす業績であったと言えよう。だから私は、学者としては梾斎を無条件で買うのである。

そうだ。梾斎にもう一度チャレンジしよう。巨大な学者、梾斎の新側面を発掘するなどと、大それたことを考えるのではなく、我が心象に捉えた梾斎なら書けるかも知れない。「まんじ」の同人となったのはそのためだったのではないか。

事実関係の紹介は、梅谷文夫の『狩谷梾斎』と『狩谷梾斎年譜』の丸写しで行こう。素晴らしい表現があれば、それをなまじ自己流に直して改悪する愚は犯すまい。

しかし、待てよ。それでは剽窃どころの話ではないではないか。

かくして、「梅谷文夫の研究を下敷きにして」という副題をつけることを前提に、主題を『狩谷梾斎讃歌』とすることにした。いずれにせよ、梅谷文夫の『狩谷梾斎』へ案内する前座として、まずは書き始める。

(二) 豪商津軽屋

狩谷梾斎は天保六年(一八三五)閏七月四日、浅草伝法

院前の津軽屋新宅で永眠した。

前月の十日以来、食事が採れなかった。死の前日に椀斎を見舞った松崎慊堂は「万無一生、而精神如平日、言石経校文、淳化帖事数語、亦如平日、向晩握手而別、暗泣三声、余亦腸断」と『慊堂日暦』に記す。簡潔な漢文は、男の悲悼を適く表現する。六十一歳であった。

そして、その一ヶ月後の八月、米問屋津軽屋の嗣子狩谷懐之は、津軽藩に対して金十二万七五六九両の巨額債権を放棄し、その功により三百石加増され千石となる。天保大飢饉の最中であった。いずこの大名も財政難に苦しんでいた時代ではあったが、町人学者と言われた椀斎が並の財産家ではなかったことが、この一事によってもわかるであろう。

椀斎が学問上の偉業を成し遂げたのは、純粋に真実を求め続けた椀斎の考証精神と共に、当代一流学者のほとんどを友とした椀斎の人間的な魅力、そして津軽屋の財力にも大きな恩恵を受けていた。だから私は、この讃歌を、椀斎の親友の松崎慊堂と津軽屋の経済力の紹介から始めたのである。

しかし、椀斎は津軽屋に生れたのではない。養子であった。

津軽屋は八代目三右衛門保古が寛政元年(一七八三)に四十四歳で亡くなってからずっと後継者問題で悩んでいた。保古には男子なく、正妻満寿の長女多仁に本両替屋三谷勘四郎の二男麻五郎成美を迎え、保邦を名乗らせたが、病弱でわずか一年余り後の寛政三年に亡くなってしまった。

子が無かったので、多仁に再び婿を迎えることになったが、人選に難航し、寛政四年になってやっと京都の呉服問屋槌屋四郎左衛門の二男勝三郎を迎えた。しかし、今度は養母満寿との折り合いが甚だ悪く、数年間にわたって内紛が続き、結局は寛政十年(一七九八)に至って勝三郎を離縁してしまう。子は得たがいずれも夭折している。

多仁が三度目の養子を迎えたのは翌十一年三月のことである。板倉助次という名は分っているが、出身は詳まびやかでない。江戸屈指の札差坂倉屋に助次の名があるので関係があるかも知れない。

ここで不審なのは、板倉助次が家名を正式に相続した前日に多仁が病死してしまったことである。通常ならここで婿入りはなかったことになるが、どうやら多仁の死を承知で入籍したのではないかと思われる。それには八代目保古の妾つねの三女善(よし)を後添えとする約束があったのではなかろうか。後に椀斎の妻となる善はこの時十四歳であった。

しかし善は助次との婚約をどうしても承知しなかった。まだ幼さを残す一途な娘の説得に後見人達は手を焼

いた。その真の理由はまわりでもうすうす気がついていた。

椀斎のことを津軽屋の娘の恋婿と伝える口碑がある。今に残る肖像を見ても椀斎は容貌がととのっていて、柳橋の芸妓に惚れられたとの伝承も十分にうなずける。善にとっては十一歳年上の分家筋に当る椀斎に嫁ぐことが少女の夢だった。

跡取りの多仁が生きていれば、それは祝福された縁組であった。椀斎の高橋家と本家筋の津軽屋は、この頃、またいとこの代であったが、高橋家の神田明神石坂下と津軽屋の湯島一丁目は、目と鼻の距離であり、近い親戚同様であった。

学問好きの善が椀斎にあこがれを抱いたとしても何の不思議もない。だから嫁入りならまったく問題なかった。しかし、婿取りとなると話は異なった。

その時すでに椀斎は書肆高橋青裳堂の当主であり、姉は嫁いでおり、高橋家には実母佐藤氏の他、跡継ぎがいなかった。婿にと望まれても簡単にイエスと言える状況ではなかった。

一方の善も妾腹の三女で、正腹の多仁とは立場が異なっていた。既に嫁いでいたとは言え、別の妾腹の二女なみもいた。相続を安定させるためには、多仁の婿すなわち板倉助次の後添いとなることが要求されていた。

しかし、善はどうしても承知しなかった。そうなると周りも知恵を出さざるを得なくなる。善の意向にそった形で、分家筋の椀斎を養子で迎えて、善に配する案が急遽浮かんできたのである。

単なる婿と養子では権限が大きく異なる。椀斎の実母佐藤氏もそれならということになった。書肆の高橋青裳堂の跡継ぎは椀斎と善の第二子を当てれば良い。

それよりも何よりも、椀斎は善の一途さをいとおしく思った。器量よしで利発な点は、二人の間に生れた二女で後に今少納言と称された多加とそっくりであった。善のひたむきさも、多加が伊澤蘭軒の三男柏軒に惚れて押し掛け女房になったのと良く似ていた。

ここに至りようやく話はまとまり、板倉助次は正式に離縁される。もっとも、中途半端な状況に置かれた板倉助次は元後見人をかく首する事件を起こし、実質的には実家に帰っていた。

かくして善は遂に粘り勝った。そのことが、当主に人を得なかった津軽屋を救ったばかりでなく、椀斎が学者として大成するための道を開き、もって津軽屋の名を不滅のものにした。私が椀斎の恩恵を受けたのも、元をただせば善のお陰だつたとも言えるのである。椀斎は幸せであった。私も幸せである。

しかし、善は三子目の二女の多加を生むと二十五歳の若さで亡くなる。椀斎はその後多くの勧めにもかかわら

ず、後添えを貰わず、妾も持たなかった。まさに、津軽屋の善の恋婿であった。

（三）師事

椀斎は安永四年（一七七五）十二月二十三日に江戸の神田明神石坂下で生れている。津軽屋のあった湯島一丁目の台地下の横町である。

生家の高橋家は代々与惣治を称する書物問屋であった。屋号は青裳堂、姉にとまがいた。

初めの名は真末（まさやす）で、椀斎の号は二十歳頃から使っている。椀の字は国字で音はないので、最初は国学風に「ねむのや」と読ませたのかも知れないが、今ではエキサイと読むのが定説である。屋号の青裳は合歓木（ねむのき）の異名である。

椀斎は、書肆の生まれなので幼い時から読書好学の風があり、寛政と年号が改まる十五歳頃から、古書の書写を精力的に進め、寛政二年（一七八〇）には書を求めて、第一回目の上方旅行を行っている。その頃、家督を相続した模様で、翌三年には父高敏が亡くなっている。

最初は、伊澤蘭軒と共に儒学を泉豊州に学んだ。森鴎外によれば、椀斎が十三歳、蘭軒が十一歳の頃と言う。この時からの終生にわたる蘭軒との交友、いやふたりが亡くなってからも続く狩谷・伊澤両家間の交流は、鴎外の『伊澤蘭軒』に詳しい。私が冒頭で、森鴎外は狩谷椀斎の評伝をこころざしながら書けなかったといったが、正確に言えば、『伊澤蘭軒』に、あまりにも詳しく椀斎を書いてしまったからかも知れない。

泉豊州は細井平洲の女婿である。講義はうまかったようであるが、その学風は学問というよりも応用に重点を置くタイプで、鴎外は、椀斎や蘭軒が「能く拘儒たることを免れしめた」と既成学派の学説に毒されなかったことを喜んでいる。椀斎にとって最大の収穫は終生の友、伊澤蘭軒を得たことであった。

その後、液斎は国学者の村田春海や屋代弘賢に学ぶ。椀の字を「ねむのき」と知ったのはその頃であろう。書家として有名な屋代弘賢からは書も学んだ。

村田春海に師事したのは親友清水濱臣の紹介である。濱臣は椀斎より一歳下であるが、寛政五年に池之端の西隣、茅町で医者を開業している。その頃、椀斎の青裳堂も神田明神石坂下から池之端に移っているので、春海への師事は十九歳の時であろう。

椀斎が清水濱臣らと共に、『続日本紀』や『文徳実録』などの六国史校読をほぼ終えたのが寛政七年（一七八五）二十一歳の頃である。椀斎は『本朝度量権衡攷』付録の冒頭に「予、弱冠の頃より、皇国の制度を知らんと思ひて、国史、律令・格式など、くり返し読むに、知り難き事の多かる中に、度量権衡は……」と述べている。弱冠

は二十歳であるから、この頃、六国史の他に『延喜式』などの校読も終えている。

楨斎の学問的な興味は、儒学から始まったものではない。自身で述べているように、「皇国の制度を知らんと思ひて」日本の古典を読む内に生じた学問的な好奇心がその始まりにある。幸いだったのは、師の村田春海が、賀茂真淵に付いた国学者でありながら、本居宣長などの古道説や漢学排斥に対しては反対を唱えていて、儒学に対しても偏見を持っていなかったことである。これが、楨斎の学風を広く公正なものとした。

翌、寛政八年(一七九八)には、藤貞幹の『衝口発』を校読している。古代日本について中国や朝鮮などと比較文化史的な視点から考証した書で、日本文化固有説に疑問を呈すなど、現在の史観にも通ずる内容が多くあり、楨斎にとっては学ぶ点が多かった。しかし貞幹は、『衝口発』の一部に、自分が捏造した偽書を証拠として採用して、完全なルール違反を犯している。それを暴いたのが本居宣長である。

宣長は、藤貞幹の『衝口発』を「みだりに大御国のいにしへをいやしめおとして、かけまくもいともかしこき皇統をさえに、はばかりもなくあらぬすぢに論じ奉れるなど、ひとへに狂人の言也」と『鉗狂人』を書いて激しく論難したのである。

楨斎が校読した頃には両書とも未刊ながら、『衝口発』が問題の書であることは良く知られていたらしい。『衝口発』と同じ装丁の『鉗狂人』が楨斎の手元に残っていたからである。それなのに、なぜわざわざ校読したのであろうか。本居宣長の『鉗狂人』と比較して読むことが目的だったのであろうか。楨斎と貞幹の関係については後述するが、学風として、楨斎が宣長よりも貞幹に興味を持っていたのは間違いない。貞幹の発想に学び、それを実証的に越えたところで楨斎は成長した。

(四)第二回上方旅行

楨斎が古書を求めて第二回目の上方旅行をしたのは寛政九年(一七八七)、二十二歳の時である。この時、『文館詞林』の第六百六十八巻ほか一巻を得ている。唐の許敬宗が編集した詩文集で千巻あったというが、中国では散逸して、日本にのみ二十余巻残ったものである。価格は三十両を越えたらしい。青裳堂の経営規模も決して小さくはなかった。

また、この時の上方旅行の逸話として、楨斎はある町屋で、『妙法蓮華経』を反古にして籠を張っているのを見つけた。それは江戸前期の貞門派俳諧の祖、松永貞徳が千部発行して東山の庵室柿園に納めた法華経の刊本であった。残部が十部ほどあり、全てを買い求めた他に、京都の本屋にも手を廻して集めたことを、楨斎の弟子、

岡本況斎が『況斎雑話』に伝えている。本屋としても目利きであったと言うことであろう。

京都では竹苞楼を訪ねたはずである。二年前に『好古小録』、その年に『好古日録』と言う藤貞幹の本を出した老舗である。

貞幹については、『衝口発』の項でふれたが、古書や古器類の贋作を作る癖があり、学者というよりは物マニアックな人物であった。しかし古代史の見方や鑑識眼には優れたものがあり、彼が取り上げた古書画の多くが、現在、国宝や重要文化財になっている。竹苞楼に世話を受けていたと言うが、棭斎の訪れた前年の寛政九年に亡くなっている。

ちなみに貞幹は尺や斗など古い計量器を集めたり複製したり偽造したりしていて、棭斎もしばしば『本朝度量権衡攷』で取り上げている。学問への態度は異なるが、興味対象は実によく似ていたのである。

余談ではあるが、三浦佑之が『金印偽造事件』という文庫本を書いて、『金印』すなわち「漢委奴國王印」は偽造だと改めて提示している。その中にも藤貞幹が登場している。彼が絡むとにわかに偽造説が信憑性をもってせまってくる。そういう人物であった。

棭斎も『本朝度量権衡攷』の中で、藤貞幹が璽印を偽造したことを「彼の勅書は、張台が言によりて曲尺七寸六分の度を起し、其の尺にて璽印を作り、贋造せしものなるべし」と述べている。金印も疑わしい。

棭斎は上方旅行の帰路、松阪鈴屋に本居宣長を訪ねている。この時、宣長は六十八歳、『古事記伝』の完成目前であった。しかし、この鈴屋訪問は、賀茂真淵と宣長の「松阪の一夜」のようにはならなかった。宣長の行く道と棭斎が求め道は、あまりにも異なっていた。

（註1）坂本守正氏は長編『七星旗の征くところ・庄内藩戊辰の役』を荘内日報に三五七回にわたり連載。商社マンを経て、漢詩漢文を味読し、雑誌「冬青」を主催。平成七年五月永眠。享年七十五であった。

狩谷棭斎讃歌（二）

新井宏

（五）本居宣長（一）

本居宣長と言えば、江戸時代に狩谷棭斎の対極にあった学者で、何よりも明治維新のひとつの思想的なバックボーンとなった神がかり的な天皇制教学、すなわち『古事記伝』を挙げなければならない。それとともに、宣長が没入した古事記には、賀茂真淵から現代に至るまでくり返し提出され続けている偽書説があることも想起しておかなければならない。

もし、本居宣長が『古事記伝』によって「心地よい国学」を提示することが無かったとしたなら、古事記はいまごろ弘仁年間に多朝臣人長が書いた偽書と決まっていたかも知れない。すくなくとも古事記の序文が後世に書かれたことなど、史料批判をすれば簡単にわかる話だからである。そうなっていないのは、ひたすらに宣長が古事記を日本の思想書に高めてしまったからである。

宣長の古事記研究には、ふたつの側面がある。ひとつは日本の古語読法の実証的な研究であり、もうひとつは、古事記が日本書紀よりも価値が高いと主張し、ナショナリズムを高揚した思想である。周知のように後者の立場が平田篤胤に引継がれ、明治維新以降の天皇制理念のバックボーンとなった。

すなわち、古事記は、拙劣な文章に見えても、中国風にアレンジされた日本書紀には失われた古代日本人のままことの言葉と心があり、古事記から「漢意」や仏教や儒教との「習合」を徹底して取り去って、再構成したところに「大和魂」があると宣長は主張したのである。それは、和語に内在している「もののあわれ」の実証的な研究とは離れた観念的な世界であった。

「美しい理論」すなわち「心地よい理論」は、それが

豊富な事例によって検証され、飾られた時には、熱烈に受け入れられる。

島国の日本は、奔流のごとく外国文化を受け入れた時期と、内にこもって熟成させ文化的なナショナリズムを高揚させた時期が交互にやってきている。平安時代と江戸時代は文化的なナショナリズムを高揚させた代表的な時期であった。

だから古事記の内容は、唐の文化が盛行していた和銅四年(七一一)の太安万侶の作とするよりも、律令制の変質が始まった百年後の弘仁年間の多朝臣人長の作とする方がはるかに理解しやすい。平安期の思想であったからこそ、江戸の文化ナショナリズム、すなわち本居宣長の国学がはげしく共鳴したのである。

そもそも古事記は、賀茂真淵でさえ、その序文は偽作だと弟子の本居宣長に伝えていた。沼田順義も文政十二年(一八二九)刊行の『級長戸風』で数多くの理由をあげて偽書としている。史料批判と言う歴史学の基本にのっとれば、偽書の疑いが濃厚なのは、誰にでもわかることであった。

勅撰の古事記が『続日本紀』にまったく記載されていないばかりでなく、聡明さが激賞されている稗田阿礼の「稗田」姓が史書のどこにも見当たらなかった。その矛盾を「秘伝」だからだとかわす論理は、中国から一面も出ない三角縁神獣鏡を、卑弥呼への「特鋳品」としてかわす論理と良く似ていた。

しかし『古事記』の聖典化が進行して、東京帝大などのアカデミズムにとっても、古事記が偽書であってはならない存在となってしまった。そのような中にあっても、中沢見明は序文が明らかに偽作であり、稗田阿礼の実在を疑い、神統譜に日枝、賀茂、松尾神社などが登場することから、本文も平安初期の偽作とする意見を唱えて、非国民として弾圧された。この他にも、あからさまに偽書とは言わないまでも、折口信夫や原田敏明も古事記の神統譜の新しさを指摘していた。

戦後になって、天皇制の呪縛から解放されると偽書説が続出する。筏勲、松本雅明、鳥越憲三郎、薮田嘉一郎そして大和岩雄である。

このような状況に対して、流石に古事記学会も無視ばかりはしていられなかった。

しかし、古事記学会はなんと言っても古事記を正書として研究する立場の団体であり、偽書となっては一大事である。逆に言えば、古事記学会は偽書と断定さえされなければ良かった。だから、偽書説に対する全面的な反論と言うよりは、偽書説に対する「反証」を提示し、証明責任を偽書説側に投げかける方式を採っている。

これがいったん定説化した側の強みであり常套手段である。ご破算で願いましてはと行かないのが専門家集団なのである。もし偽書と決まれば、職を失いかねない。

古事記を正書とする側の偽書説に対する最大の「反証」は、古事記が「上代特殊仮名遣い」、すなわち、イ行、エ行、オ行が甲類と乙類の発音によって正確に書き分けていて、平安期に偽作するなどできないと言うことである。とりわけ、『日本書紀』や『万葉集』でも書き分けていない甲類と乙類のモ音を正確に書き分けていることが最大の反証であった。定説というのは、たったひとつでも重みのある反証を示せば、その地位に安住できる。

ところが、最近ではその「反証」も強力とは言えなくなってきた。例えば、奈良末から平安初期に書かれた仏教書『新訳華厳経音義私記』と『守護国界章』でもト音を除き、概ね甲類、乙類を正確に書き分けていることが解ったのである。

そうではなくとも、古事記の偽作者として有力視されている多朝臣人長は、古典を扱う職掌柄、甲乙の区分ができたはずである。事実、多人長が古事記について、史書に知られているかぎり初めて紹介した『弘仁私記』では、上代特殊仮名遣が完璧に再現されていると言う。多人長は太安万侶の子孫である。

『日本書紀』『万葉集』の時代でも、甲乙の区分はかなり乱れていた。ところが『古事記』には乱れがないと言う。それが『古事記』の古さの証拠であり偽書説を拒んできた。しかし、考えてみれば、完璧すぎるのがむしろおかしい。完璧さが偽書の証明なのではないか。

『古事記』の完璧さは、清音・濁音の完全な書き分けにも見られる。もっとも、この場合は、清濁の区分が不完全だったのは、むしろ奈良時代であり平安時代になると区分が完全になっている。逆に偽書説の根拠にされている。

韓国では八母音を完全に使い分けている。甲乙の発音は時代差ばかりでなく、地域差でもあったかも知れない。今でもイをウに近く発音する人はたくさんいるし、イとエの区分ができない人も多い。不完全で良ければ、何百年も前の旧仮名遣いができる人だって少なくない。

しかも、最近になって、肝心の「上代特殊仮名遣い」はなかったとする説が藤井游惟によって提示された。そもそも「上代特殊仮名遣い」は当初八母音とされていたが、今では六母音説や五母音説の方がはるかに優勢であり、出るべくして出たのが藤井説なのである。

藤井游惟によれば、現代日本語でさえ、「条件異音」と言って、母音を前後の音との関係で微妙に変えて甲類風あるいは乙類風に発音しているというのである。しかし、日本人はそれを全て同じ母音と聞き取って区別していない。ところが、八母音を区別する韓国人が聞くとこれを別の音と聴き分けるのである。すなわち、万葉の時代には、多くの文章が百済系の亡命者によって筆録されたために、日本語にも八母音あったかのようになってしまったというのである。

そこにきて、古事記の専門家である三浦佑之まで、序文だけは偽作であろうと言い出した。三浦佑之は最近「金印偽造説」を書いて話題になった人物であるが、金印を疑る目をもってすれば、序文を偽作とするのが論理の必然である。ただし、もちろん三浦は古事記本体が、日本書紀より古い内容を伝えていて、古事記そのものの価値を貶めるものではないとしている。

いずれにせよ、古事記学会としては決着をつけなければならないのであるが、ここでも「旧石器捏造」と同じ構造がある。「埋めるはずがない」「専門家が見抜けぬはずがない」と言っている内に、ついに自浄の機会を逸してしまったのが考古学界である。「偽造などするはずがない」と言うのは論理ではない。

(六)本居宣長(二)

平成十六年版の岩波文庫の『魏志倭人伝』では「邪馬臺国」の表記が原典通り「邪馬壱国」に変った。親鸞研究で実績を上げた古田武彦が、中国の『魏志』のすべてに当たって見て、臺を壱と間違えたところなどないとして、安易に原典を修正する風潮を批判し、『邪馬台国はなかった』を出してから三十三年目のことである。

実は、『魏志倭人伝』の「邪馬壱国」を「邪馬臺国」と校訂したのは本居宣長である。それは宋代に書かれた『後漢書』以降の書物に基づく校訂であろうが、確かに新しい文献で古い文献を訂正するのはおかしい。したがって古田武彦の指摘はアマチュアばかりでなく、専門家にもある程度の評価は受けた。楔斎もおそらく古田武彦の指摘を評価したに違いない。

しかし、その後がいけなかつた。

失われた九州王朝説や魏短里説などで、強引な自説を主張するのはまだ良いとしても、自説への反論に対して、部分否定をしてはそれを全体否定のように見せかけたり、反証責任を相手側に押し付けたりなど、論争を仕掛けては相手を辟易させている。学問的な議論を装ってはいるが、いわばルールを逸脱した喧嘩である。

結局、古田武彦は、自論補強のために飛びついた『東日流外三郡誌』という偽書により我田引水の論文を書き、かっての輝きを完全に失ってしまった。それにもかかわらず、いまだアマチュアの間では「古田史学」などと称して、人気があるようで、見かけだけはあいかわらず闘争的である。

程度の差はあるものの、本居宣長も自説に反する主張に対して、徹底的に攻撃的であった。上田秋成が、荒唐無稽な神話を無批判に受け入れる宣長に対して、筋を通して批判した時など、『呵刈葭(あしかりよし)』と言う本に『鉗狂人上田秋成評同弁』という凄まじい副題をつけて攻撃している。「鉗狂人」と言うのは、藤貞幹に対し

ても使った言葉で、宣長の常套的な表現であるが、その中で展開された、古語に「ん」という音があったか無かったかを巡る論争は、今では上田秋成の主張に歩がある。

また既に書いたが、藤貞幹の「衝口発」に対して、「ひとりのたぶれありて」で始まる「鉗狂人」を書いて罵倒している。藤貞幹はたしかに、自ら作った偽書を証拠として「衝口発」を書くような学者にあるまじき人物ではあるが、須佐之男命が新羅の主であるという説や、神武紀元を六百年下げる説など、現在の歴史観を先取りする視点をもっていた。それが、日本固有文化を信じる宣長にとっては、気違いに映ったのであろうが、それにしても攻撃的である。

椀斎が鈴屋で宣長に会った時に、その一年前に読んだ「衝口発」と「鉗狂人」について、話題にした可能性が高いと思うが、宣長も椀斎もそのことには触れていない。

古事記の偽書問題に触れて、必要以上に深入りしてしまった。古事記はたとえ偽書であったとしても、先代旧事本記のように相手にされなくなる書物とは限らない。また、本居宣長が古事記を発掘した偉大な学者であることに対しては、私も何の異論がない。しかし、それは偉大な思想家あるいは宗教家としての側面である。

学者の本分である研究者としては、宣長は椀斎に比すべき人物ではなかつた。椀斎が、もし古事記について書いていたなら、もっとシャープに問題点を抉っており、皇国史観の歴史に歯止めを掛けていたのではあるまいか。そんなことを思っている内に、わき道に逸れてしまった。

(七)津軽屋相続

津軽屋は、地廻米穀問屋一番組と脇店八ケ所組米屋湯島組に所属する米問屋で、津軽藩の江戸御蔵元を勤めていた。したがって、津軽屋の相続は津軽藩の公式な許可を必要としていた。

その申請書類の中にも「高橋与惣司儀、重縁の者にて、同家相続人にはござ候へども、押して所望仕り、双方熟談の上、娘方へ婿養子に貰い請け候」と、善との結婚に至る過程を正直に語っている。これが津軽屋側の経済的な理由でなかったことは明白である。やはり、善の強い意志が働いた結果であった。

この頃、津軽藩の藩主は九代目の津軽寧親で表高は四万六千石にすぎなかったが、実高は三十万石程度の大藩であった。未開の津軽平野を擁していたために新田開発に取り組んだ結果であるが、天明の大飢饉の後であり、藩の財政はいずこの大名も同じく慢性的に窮乏していた。

地廻米穀問屋というのは、関東・奥州の諸国から、江戸に廻漕されてくる米の委託販売を引き受けていた組合のことである。小売ができなかったが、脇店八ケ所組は

市中にも売りさばくことができた。ふたつの組合に属する津軽屋は、量販店のような性格を持っていた。

善との祝言が行われたのは、寛政十一年(一七九九)十二月二十一日である。棭斎が満二十四歳の誕生日を迎える二日前であった。

祝言の前日の十二月二十日に、知友吉田篁墩の遺稿『活版経籍考』の書写を終えている。この本は中国と日本の活字版に関する沿革などについて述べた未定稿であるが、出版事業の文化史的な意義を指摘し、清朝の考証学に注目した内容で、後に棭斎が清朝の考証学に惹かれ、清朝でも大きく評価されるようになる端緒になった書である。書肆青裳堂を去る感慨でもあったのであろうか、結婚の前日に書写を終えているのが印象的である。

津軽藩の江戸廻米を取扱う御蔵元は、おおむね二人の町人が勤めていたが、津軽屋は常にそのメインであった。米問屋としての独立性を維持しながらも、御蔵元として、藩の機構、すなわち勘定奉行支配に属し、廻米の運送、保管、売却やそれに伴う全ての実務を担当していた。したがって、藩からの給与があった。

棭斎の相続時には二百俵十五人扶持で、これは手数料とは別であった。石高で言えば、二百五十石相当でお目見え以上であったが、実質収入に占める割合は微々たる額であった。通称で狩谷氏を名乗るが、藩では津軽屋であり、当初は士分ではなかったようである。しかし、帯刀姿の棭斎像が伝わっている。家督相続と同時に、名を望之、字を卿雲と改めた。

津軽藩から江戸への廻船は、三陸沖まわりで海難事故が多かった。そのためであろうか、北前船による大阪廻船に比べ距離は短いが、運賃が割高であった。藩では、五万石ほどを江戸に廻していたが、米一石を一両として、五万両ほどの売上げに対して、一万両ほどの廻船料を支払っていた。

御蔵元としての取扱い手数料は、一俵につき一升すなわち二・五パーセント程度であり、これは年千両程度に過ぎない。しかし、この他にも藩へ用立てた利息収入や売買差益などがあったはずで、こちらの収入の方がはるかに大きかった。さもなければ、天保六年(一八三五)に、津軽藩の年収にも匹敵する十二万七五六九両もの債権を放棄する状況が生まれるはずがない。

大名の債務と言えば、表高七十七万石の薩摩藩の例で見ると、年収二十万両程度の財政規模でありながら、文化四年(一八〇七)には百二十六万八千両、天保六年(一八三五)には五百万両に至っている。諸大名の年収の七割以上が金利として大阪商人の手に渡ったとする説があるが誇張ではない。津軽藩も江戸藩庁だけで、いつも数万両の債務を抱えていた。米問屋は金融業も兼ねていて踏み倒されない限り豊かであった。

狩谷棭斎讃歌（三）

新井宏

（八）大病

棭斎は、家督相続した翌年の寛政十二年（一八〇〇）には畢生の著となる『和名類聚抄』の校読を始めている。『和名類聚抄』は承平年間（九三一～八）に、源順が編纂した漢和辞典であるが、内容的には日本初の百科事典ともいうべきもので、和語の語義を知るに必須の書である。しかし、原本や写本が既になく、伝本には異同、誤りが非常に多かった。

そのため棭斎は諸本に箋注を施し、誤謬を正し、誤りの箇所を明らかにして、いわゆる『箋注和名類聚抄』を著した。その原稿は三稿に及んだというが、ついに棭斎の生前に出版されることはなかった。古代の日本や古典を研究するにあたって、まず信頼できる事実関係の整備から始めている棭斎の学問的な性向をここに見ることができる。

同じ年、棭斎は『遊仙窟』という唐代の伝奇小説の校読も行っている。なぜ、隠語を用いて猥雑なところがある小説などの校読を行ったのか不思議に思って見ると、この本は平安時代に流行したもので、『和名類聚抄』にしばしば引用されていて、その訓が古い日本語を良く伝えているのだと言う。

翌、享和元年（一八〇一）には、室町時代の国語辞典『下学集』の比校をしている。これも『和名類聚抄』との関係であろう。『続世継』すなわち『今鏡』の比校も行っている。

同じ年、平安初期に書かれた『日本霊異記』の校読も行っているが、間違いの多い粗悪な写本であったため「句すべからず」の状況だったらしい。ところが、この粗悪さが棭斎の研究意欲を刺激したのだと梅谷文夫は言

う。

私にもその感覚が良く判る。仮名本『日本霊異記』をはじめとして、他書に引く説話との異同を調べ、誤字、脱字、衍字を訂正して校訂しているうちに、粗本を善本にする楽しさに、はまってしまったのではなかろうか。

その後、より良い底本を求めては校訂を繰り返し、文政三年(一八二〇)に至って初めて『日本霊異記攷証』を刊行している。実に長期にわたる取組みであったが、それでも『箋注和名類聚抄』の初稿完成よりも二年も早い。

かくして、結婚二年目の享和元年は無事に過ぎたが、三年目の享和二年(一八〇二)に桜斎は病に罹る。大病であったらしい。津軽藩の『江戸日記』によると、八月八日から翌年の十一月十四日にかけて、しばしば病気見舞いを桜斎に贈っている。

梅谷文夫が大病と判断したのは、台湾の故宮にある桜斎自筆稿本『日本霊異記攷証』巻下末に「或いは疾病に罹り、医の棄つる所となる」によっている。桜斎の自筆本が故宮にあることも嬉しいが、その事実をしっかりと確認していることにも感心する。

ただし、医者に見離された大病というのが何であったのか判らない。と言うのは、病気の期間中にも、平安朝などの説話を集めた鎌倉時代の『十訓抄』の比校を行ったり、伊澤蘭軒らと豊島郡石浜に遊んだり、また鎌倉初期の説話集『古事談』や『続古事談』の比校を行ったりしているからである。

桜斎の友には、医者に清水濱臣と伊澤蘭軒がいるが、誰に診てもらっていたのであろうか。

(九)市野迷庵

翌、文化元年(一八〇四)十月、病気から回復して間もなく、待望の第一子、喜太郎懐之が生れた。桜斎は三十歳、善は十九歳であった。

桜斎が市野迷庵に会うのは、それから間もなくである。桜斎よりも十歳年上で、桜斎と同じく町人学者であった迷庵は、神田弁慶橋の質屋市野屋の六代目で、名は光彦、字は俊卿、通称を三右衛門と言った。津軽屋の当主は代々三右衛門を名乗っており、ふたりを合わせて「今の国学は六右衛門なり」とか「江戸の学問は六右衛門にあり」と称したという。

迷庵は町人ではあるが、林述斎の門に学んだ俊英な儒学者であった。三十歳の頃、すなわち桜斎が会う十年ほど前から、学を廃し交友を絶って家業に専念したと言うが、この頃には家業の再建を終え、学問の世界に復帰していた。

桜斎は迷庵を訪れ、経書の解釈を巡って、漢や唐の注疏も重視すべきではないかと質問している。最初に学んだ泉豊洲の師・細井平洲が、古注学の流れにあった学者

なので、椛斎にとっては素直な感覚だったのであろう。しかし、朱子学の林門に学んだ迷庵は当然のように宋儒の解釈によらなければ、実用には適さないとの見解を教え諭した。

ここが椛斎の素晴らしいところであるが、いったん退いて、それから凡そ二十余月、教えに従い宋儒の伝注を鋭意研究したと言う。

そして椛斎が得た結論は、漢代の経書解釈は師法を重んじて、その論拠が明確であるが、宋儒は「心を師とし古を蔑ろにしていて」正派とは言えないと言うことであった。いわば、朱子学は本居宣長の国学と同じく、学問ではなく思想だと看破したのであった。

椛斎はこの結論を携え、ふたたび迷庵に会いに行き、迷庵の論拠を縦横に弁駁した。二十余月の研鑽結果は「徴拠明晰」であった。

迷庵の素晴らしさは、ここで「幡然として心折り」今までの学風を棄てて、漢学に従うようになったことである。おそらく、椛斎の態度も素晴らしかったのであろうが、椛斎を年下の書生と軽蔑することなく、その学問を受け入れたことは、迷庵が心広い真摯な学者であったことの証左であろう。その後、ふたりは真の兄弟のように交わったので、世人は六右衛門と称えたのである。

迷庵は、それから漢唐の注疏に没頭し、経学の基本図書である九つの経書、すなわち『周易』『尚書』『周禮』『儀禮』『禮記』『春秋左氏伝』『孝経』『論語』とその注疏書の入門解説書『読書指南』を文化元年(一八一八)に著す。漢唐の注疏を重んじる考証学の立場から書かれた、日本における最初の本格的な経書の解説書である。

椛斎と迷庵の共通点は、町人であるとか、名が三右衛門であると言うことだけではなく、事業経営者としての経験であった。迷庵が家業の質屋再建に十年間専念したことから、学んだものが多かったはずである。また椛斎の場合も、津軽屋の経営は平坦ではなかった。津軽屋とともに津軽藩の御蔵元を勤めていた同業者の菊屋の経営が破綻したのは、文化三年(一八〇六)であり、ちょうど迷庵と出合った頃である。

津軽屋は菊屋の負債の後始末をさせられたばかりでなく、その他にも藩からしばしば巨額の出銀を要請されている。この頃、津軽藩は、秋田藩、鶴岡藩、盛岡藩などと共に蝦夷地への派兵を命じられ、その主力を勤めていた。時には、出銀のため、所持する土地を担保に両替屋から八千両借金したり、幕府から四千五百両の貸付金を調達している。津軽屋の経営は計数感覚に秀でた椛斎のもとでやっとバランスを保っていたのが実状であった。

純粋培養の学者は、どこか幅に欠ける。理論を先鋭化して「美しい理論」を作り上げることができても、そこでは矛盾を切り捨て勝ちである。しかし、事業経営者の場合は、簡単に矛盾を切捨てることなど許されない。矛

盾を乗り越えて、異質なものを包容する器量が要求されている。椛斎や迷庵にはその包容力があった。

(十)松崎慊堂

市野迷庵との交友がはじまった頃、すなわち文化三年(一八〇六)には、長女糸(いと)が生れる。椛斎三十二歳、善二十一歳であった。高橋青裳堂が代々名乗った与惣次から幼名を取って与惣(よそ)と付けていることからすぐわかるのように、予定通り高橋青裳堂を継ぐため、椛斎の姉とまの養女になる。

椛斎が津軽屋へ出たあと、高橋家では椛斎の姉とまを戻して継がせていたようである。天保六年(一八三五)に椛斎が亡くなって間もなく、高橋いとも亡くなっている。三十歳であった。これにより分家高橋家は絶えている。

椛斎が松崎慊堂を知ったのも、長女いとが生れた頃である。ふたりは迷庵のところで出会った。それから三十年におよぶ親交がここに始まる。当時、慊堂は林門では塾頭の佐藤一斎を凌駕するほどの実力者であった。

松崎慊堂は明和八年(一七七一)十一月五日、肥後国益城郡木倉村の生まれである。祖父は源蔵という農夫で、源蔵の姉娘のもとに恵芳という僧が住みつき、この夫婦の間にできた子である。十一歳の時に浄土真宗の寺へ預けられたが、学問で身を立てるために十三歳頃に江戸に出て、浅草称念寺の玄門に養われ、寛政二年(一七九〇)林述斎に学び、ついで昌平坂学問所に入門している。生まれつきの学問好きであった。

慊堂は、昌平坂学問所で市野迷庵や佐藤一斎らと学び、寛政六年(一七九四)には塾生領袖となる。しかし、塾友の沢九輔が、慊堂の名で借り出した林家の典籍を質に入れて行方をくらました事件の責任を問われ退塾させられてしまった。その結果、一歳年下の佐藤一斎が文化二年(一八〇五)に塾長になり、儒学者の最高権威者の地位を継ぐことになる。後に、事情が明らかになり、慊堂は許され、享和二年(一八〇二)に掛川藩校教授となっている。

沢九輔といえば、慊堂にとっては許しがたき男であった。この事件さえなければ、慊堂は郷里の大藩熊本藩の儒者として仕官できたはずであった。恨んでいたに違いないが、沢九輔が後に服部和甫と名を変え、京都で学者として活躍しているのを知ると、和甫の『名言通』に序文を与えている。和甫もなかなかの学者であった。

慊堂は、死の直前の天保十五年(一八四四)三月まで、膨大な『慊堂日歴』を残している。江戸後期の研究のためには必見の資料であるが、最初の二巻は失われ、文政六年(一八二三)四月からの分が平凡社東洋文庫に六巻としてまとめられている。

この『慊堂日暦』に最も多く登場する人物が狩谷椛斎なのである。これを読むと、ふたりの交友の親密さばか

りでなく、梅斎、慊堂の人柄が活き活きと伝わってくる。梅斎が死した時、「遺骸を撫して慟哭す」と述べているが、慊堂も心の澄んだ大学者であった。

ここで、梅斎、迷庵、慊堂の三人に絡む逸話を紹介しよう。

慊堂は、彼よりも先に亡くなったふたりの親友のために『迷庵市野先生碣銘』と『梅斎狩谷先生墓碣銘』を遺している。

前者によると、迷庵が「朱子学を論ず」という論文を著して、朱子学は仏教教義の影響のもとで編み出された新しい解釈に過ぎず、本来の聖人の教えとは異なると主張したのに対して、慊堂が激しく反論したが、ついに迷庵を説得し得なかったこと、そして、その論争を聞いていた梅斎が迷庵の意見を正しいとした時に、迷庵が慊堂に向かって「理は宜しく是の如くあるべし」と洪声一喝したことを述べている。

林門に籍を置く慊堂にとっては、梅斎や迷庵の影響を受けて漢・唐の注疏を重視するようになってはいたが、譲りえぬ一線があった。それにもかかわらず、お互いの学識を認め合い、尊敬し合っていた様子が美しい。慊堂には迷庵と同じように心の広さがあった。沢九輔を許したのもその心の広さであった。

後のことであるが、慊堂の人柄の素晴らしさは弟子の渡辺崋山が蕃社(尚歯会)の獄で死罪となるのを、身を賭して救った行動で良く知られている。

大塩平八郎の乱を契機として、「儒教」と「蘭学」が激突したのが、天保十年(一八三九)の蕃社の獄である。その仕掛け人の鳥居耀蔵は、林述斎の三男であり、慊堂の弟子であった。

時に鳥居耀蔵は老中水野忠邦の下で目付けを勤め、幕閣の中枢にいて甲斐守を名乗っていたことから、妖怪と怖れられていた。すなわち、蕃社の獄の当事者、渡辺崋山も鳥居耀蔵も慊堂の弟子であった。

その点では佐藤一斎も同様であった。崋山も耀蔵も昌平坂学問所で一斎から学んでいた。しかし一斎は、大塩平八郎の時もそうであったが、害が身に及ばぬように、尚歯会との係わりを消すのに汲々としていた。一方、慊堂は鳥居耀蔵にも積極的に会い、門下生を通じて老中水野忠邦に上書して崋山無罪を訴えている。結局、全文三千字におよぶ無罪論は、忠邦を動かし崋山の助命を勝ち取った。杉浦明平の『小説渡辺崋山』は慊堂讃歌の著である。

私は佐藤一斎の『言志四録』にある「少にして学べば、則ち壮にして為すことあり、壮にして学べば、則ち老いて衰えず、老いて学べば、則ち死して朽ちず」が大好きである。だから、儒者の最高位に昇った佐藤一斎が身を守るのに汲々としていたのを知っても、ある意味では人間的だとさえ思っている。しかし、だからこそ、それを

超越したところで、働いた慊堂が大きく輝くのである。

実は、慊堂が菊園公(水野忠邦)に呈する書を草した日、天保十年七月二十七日、慊堂は前日より腹候甚だ悪く、食することもできないほどの体調であった。

明治維新で活躍した熊本藩の横井小楠も、一度しか会っていない慊堂について「靄然として春風の裡にあるようで、胸中にはいささかの城郭もない」と述べている。だから、慊堂が、書生時代に援助を受けた娼妓と結婚して、何かと苦労したと伝えられていても、納得できるのである。

友を見れば、人物が分るという。梅斎を語らなくとも、迷庵や慊堂を語れば、自ずから明らかになることがある。梅斎は、終生続く友、しかも当時の最高級の学者を友に持ち、彼らから敬愛を受けていた。

(十一)善の死と二女多加

文化七年(一八〇六)六月十八日朝、梅斎は妻よし(善)を失う。その年、二女たか(多加)が生まれているので、産褥の病であったと思われる。善のことは、梅谷文夫もそれ以上のことを伝えない。幼児三人をのこして妻よしに先立たれた梅斎は、その後、後妻を娶ることなく、母親代わりもよく務めて、子供たちを育てあげる。子煩悩だったと言う。

善の在りし日を想うには、どうしても二女多加の姿を通すことになる。

多加のことは、森鷗外の『伊澤蘭軒』に詳しい。多加は夙くから今少納言と称され、また単に少納言とも呼ばれた才女である。後の名は俊で、天保七年(一八三六)すなわち梅斎の亡くなった年の翌春、二十七歳で伊澤蘭軒の三男で同年の柏軒に嫁いでいる。多加はしばしば「磐安(柏軒)さんがわたしを女房に持ってくれぬかしら」と言っていたそうで、いわば押し掛け女房であった。もっとも、結婚した年、津軽屋は金十二万七五六九両の巨額債権を放棄し、経済的に困窮していた。嫁入りを急いだのには、その事情もあったのかも知れない。

梅斎の学問は、津軽屋を継いだ長男の懐之よりも多加に伝えられたと言う。和漢の書に通じ、時には父に代わって歌や文を書いたが、いずれが多加か梅斎かと言われたほどであった。特に仮名文字の美しさは歎賞すべきだと鷗外は述べている。

また梅斎の弟子、岡本況斎も「たか子といふは、梅翁のいつきむすめにして、ざえかしこく、なまなまのはかせは爪くはる」と書いている。梅斎は多加の教育を況斎に託していた。人物の評価に厳しかった況斎も、親灸した学者五十五人の中で梅斎と清水濱臣だけは特別に高く評価しているが、多加もその一員に加えている。

今少納言と呼ばれたのは、渋江抽斎の後妻で才名をは

せた五百が新少納言と呼ばれたことと対をなしているからである。『渋江抽斎』は、森鷗外が最初に書いた史伝であり、抽斎は医学を伊澤蘭軒に儒学を棭斎と迷庵に学んだ。五百はその四番目の妻である。明治十七年まで永らえたので、鷗外は五百について、『渋江抽斎』の中でいきいきと描いている。いや『渋江抽斎』が永遠の価値を得たのは、五百をいきいきと描いたからだとさえ言われている。その五百も豊かな金物問屋の出で、自ら夫を選んでいる点でも多加と良く似ている。

これも鷗外によるが、多加と五百は川崎大師に詣でた時に石川貞白の紹介で出会っている。七歳上の多加のことを五百は「思った程美しくはなかった」と言っていたという。これは、多加が若い頃、「大変美しい」との世評があったと言うことであろう。小柄だったともいう。

また、多加は書生たちと育った故か、見かけは、お酒を好むとか言葉や振る舞いに男っぽいところがあったが、女性的な繊細さも持っていた。

結婚したての頃、柏軒の兄嫁、志保から預かった姪の柏がひき付けを起こしたことがあった。志保が帰宅した時には、既に柏は回復していたが、「あの、お留守にお柏さんが」と言っていきなり泣き伏してしまった。志保は柏が死んでしまったのかと驚いたと言う。

多加が、棭斎から継いだ資質が多かったことは間違いないとしても、私はそこに善を彷彿するのである。善も、多加や五百と同じく豊かな商家で育ち、教養を身につけた「新しい女」であった。棭斎はそのような善を愛し、多加をいつくしんだのである。家庭生活でも棭斎は時代の先を行っていた。

狩谷棭斎讃歌（四）

新井宏

（十二）説文解字

妻よし（善）を喪い、二女たか（多加）が生まれた頃には、既に棭斎の『説文解字』の研究が本格化している。文化五年には未定稿の『説文新附字考』を書き終えていたようである。

『説文解字』は略して説文というが、後漢の許慎が永元十二年（一〇〇）に書いた最古の部首別の漢字字典で、漢字の成り立ちを解説し、本義を記している。説文新附字とは、『説文解字』の解説文中には使われているのに、見出しとして掲載されていない四百二文字のことで、棭斎はその内の二百四十九文字について考証した結果を『説文新附字考』として纏めている。

この考証結果は、ほぼ同時期に前後して出た数冊の清の新附字攷に較べて全く遜色がないという。特に、多数の漢碑すなわち金石文を引いて証としているのは棭斎が最初で、近代の考証を先取りしている。同書を発掘した『日本漢字学史』の岡井慎吾は「疑わしきを闕きて私見を騁せず、矜慎を極むる作」と激賞している。

棭斎は説文の研究に当っては、まず『説文検字篇』を作成している。これは江戸時代に作られた唯一の説文の索引で、他の諸字典とのリファレンスが可能になっていて、棭斎自身の研究の必要上から生まれた索引であるが、いわばデータベースの作成である。

私も自分の研究の必要上、鉄や青銅器などの分析値に関する膨大なデータベースを作成している。時間さえあれば、時には研究に直接関係しないようなデータでも収集してコンピュータに入力してきた。おそらくこの種の資料としては、世界でも最も整ったものだと思っている。このデータベースが有るゆえに、着想を得ると直ちに事実関係のチェックが可能であり、着想を膨らませること

が容易で、数々の成果につながった。

だから、棭斎のアプローチが良く判るのである。まず信頼できる基礎データを集め、利用できるように整理する。考えて見れば、棭斎の業績は、そのくり返しであった。棭斎の『説文解字』への取組みは、生涯にわたって続くが、その主目的は自らが高度に利用することにあった。

説文と言えば、棭斎の時代にその研究水準が最高点に到達した。和漢の古典を正確に読むための基礎研究であり、棭斎の他に、研究者としては、松崎慊堂と山梨稲川が良く知られている。慊堂が説文の総合的な研究者とするならば、棭斎はデータベースの作成者、稲川は説文そのものの研究者であった。したがって、研究と言う面から評価すれば、稲川が最も業績を挙げている。

棭斎と慊堂が生涯の親友であったことは、既に述べたが、山梨稲川もまた、ふたりと極めて親しい間柄であった。

山梨稲川は明和八年(一七七一)、静岡県庵原の名主の家に生れた。松崎慊堂と同年で棭斎より四歳年上、荻生徂徠の流れを汲む陰山豊洲に学び、古文辞学から説文の研究に入っている。稲川の研究は、漢字の部首のうち、右側に位置する旁により漢字を分類すると言う独創的なもので、漢代以前の古音に気付いた最初の学者である。日本ならではの研究成果であった。

それには、日本の漢字音には、呉音あり、漢音あり、唐音ありと、各種の発音が残っていたことが幸いした。説文は漢代の発音を示すが、日本に残る漢字音について、呉音、唐音などと比較してルーツを明らかにし得なかった発音、すなわち古音を見つけ出したのである。例えば、台・怡・始などが、説文では異なる発音であるが、古音では全て「タイ」であったというのである。

私も、万葉仮名の「弖」が「国字」とされているが、稲荷山古墳や江田船山古墳の鉄剣に見られることから、そのルーツを探して、朝鮮半島の広開土王碑文に見出したことがある。これも漢字以前の古字なのではないかと思っている。このように、稲川のような研究は、日本や韓国においてのみ可能なのである。

さて、横道に入ったが、山梨稲川は漢詩人としても良く知られている。それは中国清末の碩儒、兪曲園が日本人の漢詩を編集した際に、稲川の詩を六十八首も入れたことでも判る。ちなみに、荻生徂徠は四十三首、新井白石は十四首であった。兪曲園が棭斎を日東第一の学者と評価していたことについては、冒頭に述べた。もっとも漢詩では広瀬旭荘が第一位であった。

駿河に住む稲川と江戸に住む棭斎の関係は、棭斎と慊堂のように何時も共に研鑽する間柄ではなかったが、その出会いなどについて、いくつかエピソードが伝えられている。

梅斎と稲川がお互いに名を識ったのは、慊堂を通してであるが、面識はなかった。

文化十四年（一八一七）頃のことであるが、梅斎が駿河の薩陲峠に遊んだ時に、共に眺望を楽しみ、お酒を酌み交わした往きがかりの人物がいた。駿府の人だと言うので、駿府の稲川という学者を知っているかと問うと、知っていると言う。漢字に詳しいと聞いているが、そうか問えば、然りという。梅斎は会話を楽しみ気持ち良く別れたのであるが、数日後に駿府に稲川を訪れ、そこにくだんの人に再会し、驚き喜び、掌をうって笑ったというのである。

梅斎も慊堂も説文専門研究者の稲川から多くを学んでいる。その一方で、稲川も説文について梅斎にしばしば質問をしている。梅斎のデータベースの優れていた証左であろう。世人は稲川、慊堂、梅斎を称して説文の三絶ともてはやしたと言う。

稲川が亡くなったのは、文政九年（一八二六）である。その時、慊堂が碑文を撰し、梅斎が筆書している。三絶のいわれは、この「山梨稲川の碑」が、慊堂、梅斎に主人公の稲川を加えたことに由来している。碑は静岡駅から徒歩三分の宝泰寺境内にひっそりと建っているが、世に知られていないのが残念である。もっとも、実際の筆は梅斎の愛弟子で名筆家の小島成斎が書いたと言うのが、最近の説である。成斎は日米通商交渉の時、答書を書いたほどの名書家である。

梅斎の説文に関する研究は、晩年に至っても続く。松崎慊堂らと文政十年（一八二七）から始めた説文会である。『慊堂日暦』には、梅斎の和歌「説文を詠ず」

文字のせき　まだ越えやらぬ旅人は
みちのおくをば　いかでしるべき

が書きとめられている。天保四年（一八三三）三月のことであった。昌平坂学問所の学風を諷した作との説もあるが、晩年に至ってからもなお、自戒の意をこめて作った歌のようにも思える。

（十三）求古楼展観と書誌学

求古楼とは、梅斎の住まいである。書肆出身の梅斎は、もともと蔵書家でもあった。財力の支えもあり、二万巻の蔵書を持っていたというが、それらは量ばかりでなく質にも優れ、求古楼に蔵していた。ついでにいえば、当時の津軽屋は、茶器一万両、書物一万両、有金一万両の身代と称されていたとの伝えがある。

梅斎は、文化十二年（一八一五）から翌年にかけて、求古楼を会場として、市野迷庵、伊澤蘭軒、多紀茝庭、小島宝素、屋代輪池などの愛書家とともに、求古楼展観という書籍閲覧会を十一回ほど開催している。伊澤蘭軒と小島宝素は、それぞれ同名の森鷗外の著によってよく知

られているように医師である。また多紀茝庭も、幕府奥医師多紀桂山の五男の医師で、後に、日本初の漢籍解題目録となる『経籍訪古志』の編纂に深くかかわる。その関係で、医籍なども多いが、足利学校、金沢文庫、昌平坂学問所、掛川藩などの蔵書も披露されている。

参加者の中には、江戸城紅葉山文庫の書物奉行・近藤重蔵守重、号正斎もいたので、かなり便宜を図ってもらったと思われる。巷説によれば、棭斎は、植木屋に扮して江戸城内に入り、紅葉山文庫の曝書を観察したと言うが、独断専行の気質の近藤重蔵であれば、それ以上の便宜を図っていたとしても不思議ではない。

近藤重蔵は、蝦夷地調査、開拓で有名であるが、もともと昌平坂学問所で優秀な成績を収めた秀才で、その生涯には非常に多くの著作を行っている。棭斎より四歳上で、棭斎から借用した大部の『皇清経解』を売り払ってしまったが、それを見つけた棭斎がそっと買い戻しておいたところ、もう一度借用を申し込んだことがあるという。巷説ではあるが、それだけに、ふたりの人柄や間柄が良くあらわれている。なお、近藤重蔵に関する著書としては、金子正義さんが『まんじ』に三十三回にわたって連載した「近藤重蔵・富蔵の生涯と其の時代」(第一部の上が栄光出版より平成十一年に出版されたが、第一部の下は十一回までで未完、構成の膨大さに心打たれる著)がおそらく最も詳しいであろう。

求古楼展観参加者の中に、棭斎の友、松崎慊堂の名が無いが、掛川藩の蔵書も出展されているので、間接的には参加していたのであろう。ただ、蔵書のコレクションには多額の費用がかかり、この頃、掛川藩校教授を退いた慊堂には、ゆとりがなかったのだろうかなどと勘ぐっている。

求古楼展観では、各回十名弱の参加があり、通算すれば数百巻の貴重本の情報交換が行われた。この時、棭斎が出品した南宋版の『史記』は、明治維新後に中国に渡り、現在の『史記』の底本になったことで知られている。南宋版の多いなかに、朝鮮版も目立つ。

書誌学という学問分野がある。書籍を対象とする分類学で、本文の内容はもとより、その来歴、題名、作者、書写・刊行から、装丁、版式にいたるまで、書籍そのものを研究して、資料としての性質を明らかにする学問である。求古楼展観は、いわば日本における最初の本格的な書誌学研究会であり、その故に、棭斎は日本における書誌学の創始者と言われている。

この求古楼展観が、後に、江戸医学館に集った医官、伊澤蘭軒門下の森立之や多紀茝庭らの『経籍訪古志』に結実する。清朝の蔵書目録『書誌解題書』に勝る目録を作りえたのは、日本に多量の貴重書・善本が伝存していたからにほかならないが、棭斎が始めた書誌学のひとつの高まりでもあった。

（十四）隠居

文化十二年（一八一五）末の椛斎誕生日に、椛斎は津軽屋を長男の懐之に譲り隠居する。椛斎四十一歳、懐之十二歳であった。理由は年来の病身となっているが、これは決まり文句であり、より学問に集中したいことが真の理由であった。事実、その後も十六年間に渡って湯島の津軽屋に留まり、懐之を助けており、津軽屋の経営から自由になったわけではなかった。浅草伝法院前の新宅に移ったのは、天保二年（一八三一）である。

隠居した椛斎は、津軽藩から隠居料として百俵十五人扶持を受ける。椛斎が婿養子となって津軽屋を相続した時の待遇が二百俵十五人扶持であったから、隠居としては破格の待遇である。もちろん、懐之は従来通りの二百俵十五人扶持を受け継いでいる。

しかし、よく見ると、ここには事情があった。この頃、津軽藩の財政が厳しく、その二年前の文化十年には、津軽屋から一万九千両の融資を受け、その見返りとして、百俵十五人扶持を津軽屋に加増しているが、その分が、懐之に行かず、椛斎が受けるようになったのである。いずれにしても、津軽屋の身上は、津軽藩の給付に依存していたわけではなく、津軽藩が椛斎に敬意を表していた現れであろう。

椛斎が隠居した時、懐之はまだ十二歳で成人していたわけではなかった。懐之が代々の津軽屋三右衛門を襲名するのは、武士の元服と同じように、十六歳になった文政二年（一八一九）元旦である。それから以降、椛斎は三右衛門は名乗らず、かなり自由な身になる。

『霊異記』『上宮聖徳法王帝説』『古京遺文』『新撰字鏡』の研究が平行して進展する。

（十五）三回目の上方旅行

その現われが、第三回の上方旅行である。市野迷庵、松崎慊堂と連れ立って、江戸を発ったのは文政二年二月二十三日で、帰宅するのが五月二十一日、閏月を挟んでちょうど四ヶ月間の収穫多い旅行であった。

一行はまず駿府に山梨稲川を訪問する。椛斎とは二度目の対面であった。共に、説文などの最高レベルの研究者であり、その意見交換は実り多いものであったに違いない。

続いて隣の掛川に二泊している。掛川は松崎慊堂が身を置く掛川藩の在所、慊堂の弟子達も多く集まったに違いない。しかし『慊堂日暦』は文政六年からの分しか残っていないので詳細は判らない。

名古屋を経て、三月九日には伊勢山田に到着し、伊勢神宮に参詣している。

翌十日は豊宮崎文庫の蔵書閲覧に費やしている。江戸

時代初、慶安元年（一六四八）に作られた豊宮崎文庫は、その頃、多くの学者から書籍の寄贈が相次ぎ、国学研究のセンターでもあった。一行は、幕府儒学のトップ、大学頭林述斎からの紹介状を持参しているが、紹介状などなくとも、既に学者として良く知られていた一行は歓待されたに違いない。

その時の受け入れ側は、外宮権禰宜の足代弘訓である。足代弘訓としては、高名な学者が参宮した際には、この文庫で講演をするのが古例であったので、その慣例を復活させたかったが、謝礼金の問題で実現できなかったことを嘆いている。文庫衆による醵金で支えられていた豊宮崎文庫が、負担を嫌ったらしい。

足代弘訓は桧斎より十歳年下で、三十五歳であった。最初、本居宣長に批判的な荒木田久老に学び、後に本居春庭、本居大平に学んでいるが、みずから語るところによれば、この頃、大分「天狗」になっていた。その事を悟らせたのが、一行であり、とりわけ桧斎だったと言う。真の学者の凄さを知るのも真の学者である。

京都では、旧知の書肆、竹苞楼を訪問している。この時、近所に住む木屋九兵衛の息子が江戸に出奔した事情を聞き、その捜査を伊澤蘭軒に手紙で依頼している。津軽屋の従業員に頼めば済むことでも、親身になって親友に連絡をとっているところが桧斎の温かみだと梅谷文夫も紹介している。

その後、一行は吉野山に遊び、信貴山を経て、奈良に入っている。奈良では、法隆寺、薬師寺、唐招提寺を訪れ、宝物、書画を拝観している。桧斎の代表作となる『古京遺文』の初稿は、旅行に出立する前に既に出来上がっていたが、桧斎にとって、旅行の主目的が新たな金石文の探索と、拓本ではない本物の金石文を観ることにあったのは間違いない。

その意味で、桧斎が最もこだわったのは、薬師寺にある仏足石である。一行は、奈良からいったん京都に戻り、慊堂と迷庵は江戸に戻るが、桧斎だけは、拓本作りの職人をつれて再び尼辻の薬師寺に引き返す。この仏足石の拓本を採るために七日間を費やしたということからも意気込みが判るであろう。

当時、仏足石の下部は土に埋もれていたが、それを掘起して、新たな部分を明らかにし、精緻な拓本を得たという。

みあとつくる　いしのひびきは
あめにいたり　つちさへゆすれ

天平勝宝五年（七五三）の仏足石の拓本を得た謝礼に桧斎は薬師寺に金二百疋（半両）を納めている。

（十六）古京遺文

桧斎は早くから上代金石文に興味を持っていた。二十

一歳の時に、既に『那須国造碑』についての佐々十竹、新井白石の考証などを筆録している。佐々十竹（宗淳）は水戸黄門の助さんのモデルとなった水戸藩彰考館総裁である。

その桛斎に、藤貞幹の『好古小録』が大きな影響を与えたのは間違いない。同書は冒頭に「金石」の部を置き、十七篇の金石文についての考察を行っている。貞幹には、いかがわしいところがあったが、着眼点や物を観る確かさでは、極めて鋭いものがあり、本居宣長のように、観念の世界で無から有を生ずるのとは大きな差異があった。

桛斎の『古京遺文』は、平安遷都以前の金石文二十九編について考証したもので、平安初期の金石文三編の考証も付録として加えている。薬師佛造像記、釋迦佛造像記、宇治橋斷碑、二天造像記、船首王後墓版、小野朝臣毛人墓版、山名村碑、那須直韋提碑などの金石文についての初稿が成ったのは文政元年（一八一八）である。自序によると、桛斎は暑さに弱かったようである。生来の病と関連していたかも知れない。台湾の故宮博物館や国立博物館、静嘉堂文庫などに写本が多く残り、最終的には、天保三年（一八三二）以降の成立とされている。

もちろん、金石文への関心は清朝考証学の影響であるが、当時の研究が、古事記や六国史などの文献資料に重点があり、金石文などは好事家の道楽とみなされていた中で、いわば現在における考古学的なアプローチをいち早く取り入れ、かつ徹底して考証した点が、桛斎をして金石学の祖とするゆえんである。

『古京遺文』以降、薮田嘉一郎が昭和四十九年に『日本上代金石叢考』を著すまで、類書がまったく現れなかったのも、如何に桛斎の研究が卓越していたかを示すものであろう。薮田は、同書の中で、『古京遺文』について、比倫を絶する名著とし、知識の該博、方法の正確・鋭利、論断の明快・剴切を絶賛している。

そもそも、記録された歴史は、後世に、意図する目的にそって書かれている場合が大部分である。それは、疑いが生ずることがないように、ある意味で体系立っていて、理解し易く表現されている。それに対して、金石文は同時代的であり、断片的な事実を伝えている。近代の歴史学の基本が、史料批判にあることからすれば、記録された歴史に潜む作為をどのようにして取り除いて行くかの過程で、金石文の占める役割がいかに大きいかは、いうまでもないことである。

すなわち、桛斎が金石文の研究に精力を注いだこと自体が、近代的な歴史学のスタートなのである。事実、桛斎は金石文によって、書かれた歴史の虚偽を数多く指摘するのである。

狩谷棭斎讃歌（五）

新井宏

（十七）　十七条の憲法

今日では、「聖徳太子がいなかった」ことは歴史学界の常識となっている。国民感情を背景として「聖徳太子がいなかった」ことを否定する書物もあるが、学術問題としてはもはや勝負があったのである。

それは、聖徳太子の業績の全てが、史料批判により、聖徳信仰として後世になって作られたことが明白になったからである。すなわち、推古天皇の甥の厩戸皇子は実在したが、「十七条の憲法」や「三経義疏」を作った聖徳太子はいなかった。

「十七条の憲法」が聖徳太子の真作ではなく、日本書紀の作者の潤色だと初めて指摘したのは棭斎である。そのため、「聖徳太子はいなかった」とする多くの著作で、まず最初に必ずそのことが紹介されている。棭斎が今日知られているのはそれ故とも言えるほどである。しかし、面白いことに棭斎の研究第一人者の梅谷文夫は『狩谷棭斎』の中で、そのことについて一言もふれていない。

棭斎がなぜ「十七条の憲法」は聖徳太子の真作ではないとしたのかについては、文政十二年（一八二九）頃に書いた『文教温古批考』の中で次のように述べている。

憲法を聖徳太子の筆なりとおもえるはたがへり。是は日本紀作者の潤色なるべし。日本紀の内、文章作家の全文を載たるものなければ、十七条も面目ならぬを知るべし。もし憲法を太子の面目とせば、神武天皇の詔をも、当時の作とせんか。

棭斎は、十七条が日本紀の文体に似ていることもその理由として挙げている。

この棭斎の見解を受けて、内容上から偽作説を展開したのが津田左右吉である。その十二条にある「国司国造」が、大化改新の前にあったはずがない等がその主な理由

である。

もちろん、偽作説には強固な反論が相次いだ。しかし、現在では、聖徳太子の実在を示す五つの証拠、すなわち、十七条の憲法、薬師像光背銘文、釈迦像光背銘文、天寿国繍帳、三経義疏のいずれもが後世に書かれたものであることが確定してしまい、もはや新たな証拠が現れないかぎり、聖徳太子の復権は困難なのである。

その中でも、三経義疏のひとつ『勝曼経義疏』が、藤枝晃の研究により、昭和四十年、敦煌から出た『勝曼経義疏本義』とほとんど同一で、中国のものだとわかったことが決定的であった。これらをもとに、更に長屋王の木簡などによる史料の解釈を加えて、大山誠一が自信をもって、聖徳太子非実在論を展開したのが平成十一年のことである。これによって、歴史学界内の常識が一般にも良く知られるようになった。

すなわち、梼斎の日本書紀に対する鑑識眼は時代を先取りしていたのである。これは、現在、古代史分野における最大争点、大化改新の「肯定論」「否定論」を先導する業績でもあった。

ところが、梼斎は「十七条の憲法」の日本書紀潤色を唱えながら、聖徳太子の実在までは疑問視しなかった。もっとも現在の歴史学界でも、聖徳太子の存在は否定しても厩戸皇子の存在を否定しているわけではないので、当然と言えば当然であるが、それは、梼斎が心血を注いで研究した『上宮聖徳法王帝説』の存在があったからである。

『上宮聖徳法王帝説』は法隆寺に伝わった雑多な綴り合せの総称であるが、日本書紀と並んで、聖徳太子の事績を伝える最古の伝記資料である。しかし、『上宮聖徳法王帝説』が初めて世に現れたのは、水戸藩彰考館が『大日本史』のための資料蒐集にあたっていた元禄八年(一六九五)で、その後も一般的には知られていなかった。その存在を広く知らせたのは塙保己一の『群書類従』である。

これを読んだ梼斎は、「其の書を翫味するに、未だ嘗て古事記日本紀を見ざる者の撰する所に似たり。其の古きこと、知るべきなり。……読まざるべからざる奇策なり」と喜ぶのである。それは、日本書紀が聖徳太子の薨去を推古二十九年二月五日としているのに、『上宮聖徳法王帝説』は三十年二月二十二日としており、しかもその忌日が法隆寺金堂の「釈迦如来坐像光背銘」と一致していたことなどによる。

すなわち、梼斎が最も信を置く金石文の「釈迦如来坐像光背銘」と一致する『上宮聖徳法王帝説』は、ここに日本書紀の記事を訂正するに足る資料となったのである。その結果、『上宮聖徳法王帝説』にのみ伝えられている記事も聖徳太子の事績として評価されるようになった。

このような梼斎の研究を引継いで、聖徳太子実在説の頂点を極めたのが、昭和二十六年の家永三郎の『上宮聖

徳法王帝説の研究』である。家永は、ひたすら聖徳伝承を肯定的に認めて、その体系化を行ったのである。だから家永は、椛斎の業績を「何等の先行研究を俟つことなく、一代の努力によりて権威ある註釈を完成し、爾後その地位を凌駕するものの出現を困難ならしめたる点、恰も宣長の古事記伝の古事記におけるが如き地位を有す」と絶賛するのである。

ところが、この『上宮聖徳法王帝説』は、延喜十七年（九一七）以降にできた『聖徳太子伝略』を批判しており、日本書紀よりもはるかに後代に成立したもので、日本書紀を訂正し得る史料などではなかった。すなわち、「聖徳太子はいなかった」とする認識が歴史学界に広まるにつれて、『上宮聖徳法王帝説』の評価も下落するのである。

たとえば、「釈迦如来坐像光背銘」にしても、そこに示された、法興年号、法皇、知識、仏師、などの表現が推古朝のものでは有り得ず、釈迦像とは別に後世になってから、光背が造られたことが明らかになったことがある。椛斎が金石文として信用したものが、後世のものだったのである。また、天寿国繍帳にしても、そこに天皇の用語があり、推古朝の作では有り得ないばかりでなく、用いられた日付も後世の儀鳳暦によるものであることが判ったのである。

それにもかかわらず『上宮聖徳法王帝説』には、古事記や日本書紀よりも古い記事があることで、その価値はいささかも揺るがないと考える学者達がいる。それは、『上宮聖徳法王帝説』がもともと雑多な綴り合せの性格を持ち、最終成立が平安中期に下がるとしても、古い伝承については、後世になって作り出されたとは考えられないとする立場である。

たしかに椛斎が心血を注いだ考証が、「聖徳太子はいなかった」ことぐらいで霧散してしまうものではないであろう。最初に「十七条の憲法」を否定して、聖徳太子の業績に疑いを抱いたのが椛斎である。問題含みであっても『上宮聖徳法王帝説』の価値をお見通しだったとするのが、椛斎ファンの立場であろうか。

（十八）和銅開珎

日本における歴史上の学説をたどって行くとたいていは新井白石か狩谷椛斎に至る。椛斎は「十七条の憲法」が聖徳太子の眞作ではないことを初めて明らかにしたことで今日の歴史学界では評価を受けているが、それはむしろ最近のことで、戦前には公然と述べることがはばかれた学説であった。

それに対して、むしろ良く知られていたのが「和同開珎」を初めて「和銅開寶」と読んだことである。

この「和同開珎」は中国以外で初めて発行された銭であり、日本ばかりでなく中国からも出土することが知ら

れている。通説では日本最古の通貨であるが、最近では飛鳥池遺跡から出土した富本銭の存在によって、最古とは言えないとの説も出ている。しかし、富本銭は実際に通用した銭ではなく、厭勝銭すなわち「まじない銭」であったとする説が有力なので、「和同開珎」はやはり最古の流通銭とは言えるであろう。

さて、この「和同開珎」は江戸時代には、開珍（カイチン）の読みが普及していた。珎は珍の異字だからである。しかし銭の考証家としても有名な柧斎はこれを『皇国泉貨通考』の中で開寶と読んだ。それは「珎」が「寶」から「ウカンムリ」と「貝」を外した省略形であり、「銅」を「同」と略したのと同じだとすることなどによっている。

その後、この開寶説は明治になって、成島柳北の『明治新撰譜』や『古泉鑑識訓蒙』に引継がれ、大正、昭和の主流となり、学校でもそう教えた。だから高齢者なら和銅開寶と覚えているはずである。

しかし、今ではこれを「和同開珍」とする教科書がほとんどである。開珍説が復活したのは、穂井田忠友が、和同は和銅ではなく、中国古典『国語』周語にある「和同」を採用したとする説を出した頃からで、考古学者の山中笑がこれに同調し、考古学的な資料を援用して、開珍としたことが影響している。

もちろん「珎」が「珍」の異字であることなど、いわば常識であり、最近は、これを素直に読もうとするのが流れなのであろうが、『説文解字』の権威である柧斎が、珎が珍の異字であることを知らなかったはずがなく、それを承知の上で「開寶」と読んだのである。だから私は強くこだわっている。

「開珍」説の裏付けとなるものとして、よく引き合いに出されるのが正倉院の古い文書に「国家珎寶」とあることである。ここでは珎が寶であるはずがなく「珍寶」と読むべきだと言うのが根拠であるが、それは珎が珍の異字であることの証明にはなっても、柧斎の説を否定する根拠にはならない。もともと珎は珍なのである。

もうひとつは、平安時代末期の歴史書『日本紀略』に「和銅開珍」と記録されていることである。いわば音を「チン」としていたという証拠である。しかし、これとても珎を珍とする機械的な書き写しであったと考えても不思議ではない。

柧斎が珎を寶と読んだのは、何も字格の省略を論拠にしただけではない。和同開珎の後に続く皇朝十二文銭の全てが寶を用いているし、当時の中国は開元通寶の時代である。寶と読むのが、むしろ素直なのである。

更に、東大寺伎樂面に「天平勝珎」と書かれている例もある。これは年号の「天平勝寶」のことであり、一例とは言っても珎を寶の替わりに用いているのである。

このように、私は開寶説に歩があるように思うが、最

近は「開珍」説を採用するのが主流なのである。したがって、いくら梜斎ファンとは言っても、新たな論拠を見出さなければ、進展はできない。そこで細々ながら、珎の文字にこだわり、それを金石文などに探し続けている。その結果、ふたつほど気になる事例を探し出した。

ひとつは『宋書』の「倭の五王」の二人目の珍を『梁書』では彌と書いている例である。彌は弥であり、字形の似る珎の誤り、すなわち珍であるとするのが、今日の定説であるが、そうだとすると、原書の『宋書』に珍とあったのを『梁書』がわざわざ異字の珎と書こうとしたことになり、不自然である。もしかしたら珍はオリジナルでは彌あるいは弥または珎となっていたのではないか。しかし、そこで留まっていて、珎を寶とする説にはまだ繋がらない。

もうひとつは『広開土王碑文』の中に雜珎城とでていることである。同じ城を雜弥城と記しているところもあるので、珎と確定できないが、これがはたして雜珍城だったのであろうか。その城名の現在地名を探しているが、まだ手ごたえがない。

そんな中で、偶然に、「開寶」説を強力に支える見方が現れた。それは大東文化大学の中国文学者、荻庭勇の書いた「漢語と視点」と言う講演録の中である。しかも、それは「和同開珎」とは全く無関係な『稲荷山古墳の鉄剣を見直す』(学生社)と言う論集の中なのである。

おそらく、荻庭勇は古典中国文学の権威として、「稲荷山鉄剣」の銘文について求められて意見を述べたのであろうが、その講演の冒頭部分からして異例なのである。そのまま引用すると次のようになっている。

二点について申し上げたいと思います。まず一点は、日常恒に思っていること。それからもう一点は当然のことながら、この鉄剣の銘について申し上げたいと思います。

第一点は、日本で最初に鋳造されたお金(銭)の読み方の「不思議」について、感ずることを申し述べたいと思います。……

そして、荻庭は、「開珎」を「開珍」と読むことを痛烈に批判するのである。

この講演の目的が「稲荷山鉄剣」の銘文解釈のためであるのは明白である。それなのに、いわば全く無関係な「和同開珎」の読み方について、強烈に批判することが、極めて唐突である。しかも、講演の流れから言えば、この「開珎」の読み方についての紹介は、中国文の理解を助けるための例として示されているのである。例示である以上、それは中国文学者にとっては共通の基本的な理解であるということである。

その意とするところは、漢字は固有の詞性を持つのでなく、同じ字形であっても、その置かれた位置によって意味が決定されるものであって「異説の興る確率が少な

く、異説が勃起しても容易に氷解する」ように理解することが基本であるとして、「現下の考古学の専門家の多くが、依然としてその視点を持ち合わせていない」と批判するのである。

しかし、講演録のせいか、文章が推敲されていなくて、説明に飛躍があり、理解に不安があったので、『まんじ』同人で漢詩人の鯨游海氏に確認を求めたが、氏も秋庭勇の文章は乱れているが、私の理解で良いと言う。氏は『論語』に、次々と斬新な解釈を導入しているが、その壮大な学説のひとつ「君子不器」の不を丕（大の意、不にも同意あり）と同義とすることなども、萩庭勇の言っていることを知るとますます説得力を増す。

そうであれば、まさに萩庭勇が言うように、開元通寶に学んで作成した「和同開珎」をわざわざ「カイチン」と読むことこそがまさしく「珍」なのである。

なお、萩庭勇と同じく大東文化大の中国文献学者で、書家、作家、イラストレーターでもある山口謡司も国宝の『尚書正義』の刻工の名に王珎、王珍、王宝と見えることを論じる中で、「和同開珎の読み方を改めて史学の先生に伺いたい」と言いながら、結論的には開寶説を採っている。

やはり、『説文解字』の権威、狩谷棭斎の読み方が正しかったのだ。後世の学者達が寄ってたかって、解釈を後退させていたわけである。

ついでに言えば、和銅のいわれについても、世の中に誤解があるので正しておきたい。それは私の専門でもある金属考古学に関係しているからである。

和銅という言葉が初出するのは『続日本紀』で、その中には、慶雲五年（七〇八）武蔵国秩父郡から「和銅」が献上されたこと、これを喜び祝って「和銅」と年号を改めたということ、そして銀銭・銅銭が作られたことなどが書かれている。ここで言う和銅とは、自然銅のことであり、精錬せずに銅として使えるもので、秩父の今宮神社には十五キロの塊として残る貴重なものが残る。しかしこの和銅が銭の鋳造に用いられたのではない。

それは、和同開珎銭の鉛同位体比の分析から、長門長登鉱山の銅、すなわち東大寺の大仏と同じ銅が用いられたことは既に明らかにされており、秩父の和銅（自然銅）とは全く関係がないのである。

したがって、和銅は秩父郡から献上された和銅を意味するのではなく、和銅年間に出された銭の意味を示すもので、中国や皇朝十二銭に見られる発行年と同じであり、この点でも棭斎や成島柳北の理解が正しかったのである。

棭斎ファンとしては、一日でも早い和同開寶（わどうかいほう）の復活を願っている。

狩谷棭斎讃歌（六）

新井　宏

（十九）　四回目の西遊

三回目の西遊からわずか二年後の文政四年（一八二一）三月二十日に、棭斎は長男の懐之（ちかゆき）と津軽屋の鳶頭源七を伴って、中山道経由で上方へ向った。棭斎四十七歳、懐之十八歳、供の源七は五十代半ばであった。

中山道のルートを採ったのは、上野三碑（山ノ上碑、多胡碑、金井沢碑）を実見するためである。

山ノ上碑は、その中でも最も古い天智十年（六八一）の墓誌で、書体に古い隷書体の特徴が見られる。また、多胡碑は、和銅四年（七一一）に多胡郡が設置された記念碑であるが、力強い六朝風の楷書体で書かれている。文中に「給羊」とあり、羊を方角と見る説、人名と見る説、あるいは、藤貞幹の「給半」とする説などが出ていて、棭斎はその解明を期していた。現在では、多胡を「多くの胡人」と見て、渡来系の人名とする説が有力である。名筆家でもあった棭斎は、上野三碑の書体にも大きな関心を払ったに違いない。

この旅行に長男懐之を同行したのは、棭斎が十六歳で初めて上方旅行をした時の経験を息子に伝えたかったからであろう。棭斎にとっては、三回目の上方旅行で果たせなかった課題を丁寧に拾って行くことが主な目的であった。

四月八日に京都に着いてからは、子息の見聞を広めるために、稲荷祭（十一日、伏見本社への還幸祭）、御蔭祭（十四日、御蔭神社神霊の下鴨神社奉迎）、坂本山王祭（十六日、日吉神社祭礼）、葵祭（十七日、賀茂御祖神社と賀茂別雷神社の例祭）などを見物している。京都はまさに祭りの季節であった。

今回の旅行では、事前に手を廻して、各所で秘蔵の古典籍などの閲覧や影写を行っている。その中に、京の医

師、福井榕亭の秘蔵していた『新修本草』巻十五の影写がある。

森鴎外の『伊澤蘭軒』によれば、以前に椀斎が交渉した際には、榕亭はすげない返事をしたが、この度は親しく訪問されて厚遇せざるを得なかったと言う。そして前年のことは「途中の間違い」として謝して、やっと影写の許可を与えている。

椀斎は、福井榕亭の第宅庭園が悪趣味に飾り立てられていて、三日も居たら病気になってしまうと述べている。榕亭は書籍を一切他へ貸し与えないなど、難しい人物だったようで、椀斎も閉口していたようである。そのこともあって、椀斎は類書から事前に『新修本草』巻十五の復元版を準備して臨み、榕亭の所蔵本が、それほど秘密のものではないことを匂わせ、一夜だけの借り出しに成功した。

いわば、榕亭を騙したわけで、そのことが椀斎の人柄を悪くいう時に引用されたようである。しかし、椀斎のお陰で、六五九年に中国で編纂された世界最古の薬学書『新修本草』巻十五は残り世に伝えられたのである。

また椀斎父子は『小野毛人墓誌』を実見するため、御蔭祭の帰路、京都左京区の西明寺山町にある崇道神社を訪ね、埋め戻されていた墓誌を捜索したが、小石などが詰まっていて、諦めている。

毛人は遣隋使の小野妹子の子である。墓誌は今、京都国立博物館にあり、国宝となっている。長さ五八・九センチ、幅五・八センチは、いわゆる唐尺の二尺と二寸であり、計量史に興味を持つ私にとっては格別な想いのあるものである。

葵祭を見物してから、鳶頭の源七は江戸に戻り、椀斎と懐之は奈良に向う。

（二十）茶山との再会

四回目の西遊のひとつのハイライトは、菅茶山との再会である。

菅茶山は、家業の酒造業を営みながら、庶民が平等に教育を受けることで、貧富によって差別されない社会を作ろうとした進歩的な人物である。福山藩の儒官としての知遇も受け、藩校弘道館にも出講した。その私塾は後に茶山から田畑を添えて福山藩に献上されて、郷学として認可され、廉塾と名が改められている。

廉塾の門人には、有名な頼山陽、北条霞亭などがいる。茶山は化政文化期の代表的な漢詩人として全国的にも知られていたので、延べにすれば二千人から三千人の門弟が集まり、山陽道を往来する文人の多くは廉塾を訪ねた。その時、茶山は七十四歳であった。

椀斎の友、伊澤蘭軒は、代々の福山藩士で、藩医、儒官を勤めた関係で、当然、菅茶山を良く知っている。そ

の交際の始まりは、おそらく藩主阿部正精が、藩校弘道館を開いた先代の正倫から封を襲ぎ、茶山を江戸に呼んだ享和三年(一八〇三)であろう。正精は学を好み詩を善くし、蘭軒を友人の如く遇したというから、茶山の江戸出仕は蘭軒の勧めもあったかも知れない。

梅斎が茶山を知ったのは、翌年の文化元年(一八〇四)である。蘭軒と一緒に不忍池畔で校書している様子を画工に描いてもらい、そこに茶山の題詩を求めている。茶山が阿部正精に従い福山へ帰るのが、この年の十月であるから、さほど長い交際ではなかったかも知れない。

茶山が再び江戸に入ったのは、文化十一年(一八一四)五月のことである。それから九ヶ月あまりの滞在中、有名人の茶山は多くの人士と会っている。梅斎もしばしば蘭軒の宅で会い、酒を酌み交わし歓談している。茶山が帰国を控えた文化十二年の二月には、梅斎も、茶山、太田南畝、市野迷庵、久保筑水、石田梧堂らを招き宴を催し、贈り物をしているし、茶山も江戸を発つ日に梅斎を訪れている。

茶山は帰国の途中、大阪から蘭軒に手紙を送っている。『伊澤蘭軒』によれば、茶山が、清水濱臣の歌を書いてもらうように梅斎に頼んでいたが、まだ約束が実行されていないので、遅れた代償に、もっとたくさん書いてもらうように伝えてほしいとの内容である。ふたりの間の親密さを知るエピソードである。

茶山にとって、蘭軒は、江戸の学界の動きを知る貴重な人物であった。しばしば、手紙が交換されているが、当時の事情で、音信が途切れた時など、茶山は返信を待ちわびていたこともしばしばあったようである。

その中のひとつ、茶山の文化十四年(一八一七)夏の書状には、梅斎と共に松崎慊堂のことが出ている。

この年の正月、茶山が梅斎に約束していた「院之荘の古簾」をやっと入手して贈ったことがあった。梅斎がさっそく求古堂に懸けて誇示していたが、誰も関心を示さぬ中で、慊堂ひとりがこれを賛美したと、梅斎が書き送ったらしい。茶山は旧知の慊堂に江戸滞在中に会えなかったことを残念がって、よろしく伝えてほしいと言っている。

それと共に、梅斎が西遊の希望を持っていることを知っていて、自分が墓に入る前にぜひ実現するように伝えてほしいと書き送っている。しかし、二年前の三回目の西遊では、梅斎は福山まで足を伸ばせなかった。

したがって、今度の文政四年五月十九日の福山入りは、梅斎にとっても茶山にとっても待ちに待った再会であった。事実、茶山はその二週間前に、蘭軒あての手紙で、梅斎父子を「心に指を折り」待っているが、まだ来ないので、もしや帰られたのではないかと心配している。

梅斎父子を迎えた茶山は驚喜して七言絶句を作る。

時人久已棄荘樗　時人久已に荘樗を棄て

老去隣翁亦自疎　老ひし隣翁(りんおう)とも亦自ずから疎し
豈意東都千里客　豈(あ)に意(おも)はん東都千里の客の
穿来蘆葦覓吾廬　蘆葦(ろい)を穿ち来たり
吾が廬を覓(いほりたず)むとは

（読下し鯨游海）

旧知の友人や江戸の学界の様子、研究の進展状況などの話がつきることは無かった。子の無い茶山は懐之を同行した椒斎を羨ましく思ったに違いない。茶山はこの六年後、八十歳の長寿で他界する。晩年の輝きであった。

父子は宮島を訪れ、帰路は奈良、京都、伊勢などを再訪して、江戸に帰ったのは九月六日であった。その帰路、八月二十九日に駿河の宇都谷峠(うつのやとうげ)で、福山に向う北条霞亭に会う。面識は無かったが、持物に津軽屋とでも書いてあったのであろうか、霞亭から声をかけたものと思われる。「宇都山中邂逅刈谷椒斎、立交一臂而別」と題した次のような詩がある。

宇山秋雨客思迷　宇山の秋雨に客思迷(かくし)へり
邂逅逢君鼯鼠蹊　邂逅(かいこう)君に逢ふ鼯鼠(ごそ)の蹊(たに)
空有蔦蘿纏別意　空しく蔦蘿(つたかづら)の別意に纏(まと)ふ有り
相牽恨不与俱西　恨みを相牽(あいひ)くは
俱(とも)に西(にし)するに与からざると

（読下し鯨游海）

一緒に福山に往けず残念がっている。管茶山の弟子、霞亭は、その二年後に夭逝するが、森鴎外の絶筆となった史伝三部作の最後『北条霞亭』の主人公である。

森鴎外は結局『渋江抽斎』『伊沢蘭軒』『北条霞亭』と描きながら、最も書きたかった『狩谷椒斎』に遡ることができなかった。

（二十一）　朝鮮の丁茶山

ここで、菅茶山とも狩谷椒斎ともまったく関係のない李朝の丁茶山について書く。それはもちろん、菅茶山と号が通じているからだけではない。私は、椒斎と丁茶山の間に実に多くの共通点を見るからである。

まず、丁茶山すなわち丁若鏞(チョンヤギョン)は、椒斎より十三年前の一七六二年に生まれ、椒斎の亡くなった翌年の一八三六年に没している。全く同時代の学者である。しかも椒斎が考証学者として、儒学はもとより、歴史、経済から度量衡、言語学に至るまで巾広い分野で活躍したように、丁茶山も朝鮮の実学の集大成者として、儒学研究はもとより、天文学、歴史、地理、数学、政治、社会、経済、医学、そして建築や造船などの工学に至るまで、実に広範囲に活躍している。共に無条件に同時代の大学者なのである。

しかし私にとつては、そんなことよりも、狩谷椒斎も丁茶山も計量史の先達として重要な存在であった。

そもそも私が丁茶山に出会ったのが、朝鮮の尺度に関

連して結負制を調べていた頃だから、二十年近くも前になる。結負制とは朝鮮半島の独特な田制であり、田の良否によって面積単位の基本単位の「結」の広さを変えてしまう制度である。普通なら、田の品位によって、税率を変えるところを、面積そのものを変えてしまうのだから、実に複雑な仕組みであり、それだけに良く解析すれば多くの情報を引き出せる。

茶山は生涯農政改革への意欲を持ち続けていたので、結負制について、実に多くの著作を残している。それが私の計量史研究に役立ったのである。

しかも、桉斎も茶山も共に愛妻家であった。桉斎も十四歳の幼な妻を娶り、津軽屋の娘の恋婿と言われたが、茶山も当時の両班の風習とは言え、十四歳で結婚し、愛妻家として世に知られていた。

ただ桉斎との大きな違いは、桉斎は豪商の出身で政治とは距離があったのに対して、丁茶山が両班の出身で、政争に翻弄された人生を送ったことである。

良く知られているように、李氏朝鮮の歴史は、始めから最後まで、骨肉相争う殺戮で彩られている。

三代の太宗はふたりの異母弟を殺害して、傀儡の定宗を二代に立てたがまもなく自分が即位、四代世宗の子である七代世祖は甥の六代端宗や異母弟ふたりに死薬を与え、九代成宗は十代燕山君の生母すなわち自分の妃に死薬を与え、その燕山君は義母ふたりを斬殺し、祖母を撲殺、さらに異母弟ふたりに死薬を与えた。また十一代中宗もひとりの妃とその子を殺し、十二代仁宗は義母に毒殺され、十三代明宗は異母弟をひとり自決させ、十五代光海君は同母兄に死薬を与え、異母兄を部屋に閉じ込め蒸し殺しにし、さらに十六代仁祖の弟を殺害するなどの凄まじさである。その上光海君は、実父十四代宣祖を毒殺したとさえ疑われている。またその光海君の後継の長男夫婦も自殺して果てているし、十六代仁祖も自分の長男を毒殺し、更に長男の妃とそのふたりの子（自分の孫）を殺してしまっている。十七代孝宗は、仁祖の妃に死薬を与え、十九代粛宗も妃である二十代景宗の生母に死薬を与えた。きわめつけは二十一代英祖がその世継ぎの長男、恩悼世子を米櫃に閉じ込めて、餓死させてしまったことである。

丁茶山の政争に翻弄された人生も、実はこの恩悼世子の餓死事件に始まる。それはまさに茶山の生まれた一七六二年に起きたことであった。

当時、英祖のもとで南人派が権力の中心にいたが、権力回復を狙う老論派が、恩悼世子（荘献世子）の不行跡を捉えて上疏して罪に落とし、餓死させ、南人派を追放してしまった。そのため、丁茶山の父も官職をうばわれ京畿道の馬峴にひきこもる。

しかし、茶山が十四歳で結婚した年に、英祖が亡くなり、こんどは恩悼世子の子の正祖が王位につくと、南人

派が復活する。そして茶山も二十二歳の時には科挙に合格し、まもなく正祖のあつい信任を得る。

ところが、当時の南人派の若手の間では、西洋学に対する関心が高まり、国禁の天主教を信仰するものも現れ始めていた。なにしろ、政争の国である。今度は南人派さえも分裂して、攻西派が生じると、天主教への弾圧が激しくなり、王の信任が厚い茶山も遂には左遷されてしまった。

しかし茶山は、正祖の直々のとりなしで間もなく復帰すると、水原城の修築で大きな功績を挙げる。

私は七つある韓国の世界遺産の内で、最も美しいのが水原城だと思っている。正祖が旧勢力を排除して王権確立と政治改革を目指し、遷都を目的として作った城で、西洋や日本の城を参考にして、華麗にしてなおかつ大砲の攻撃に耐えられるようにレンガ積で造られている。

その水原城の築城に当って、設計図を提出し、石材の取扱いのため、西洋に学んだ起重機を活用してわずか二年十ヶ月の短期間に完成させたのが丁茶山なのである。

そして一七九五年には正三位相当の高官の位に上る。もはや誰が見ても次期政権担当の最右翼であった。

そうなると、ますます彼を天主教信者として攻撃する声が高まる。その結果、失脚して地方官となったり、また中央に呼び戻されたりを繰返す時期が続く。

そして、遂に一八〇〇年に正祖が急逝すると、権力の座に返り咲いた老論派による南人派への報復と天主教攻撃のために、今度こそ完全に失脚させられ、全羅南道の康津に流されてしまう。しかもその時の天主教弾圧によって、茶山の二人の兄も拷問で殺されたり流刑になったりし、甥からも犠牲者がでて、秀才一家の丁家は大打撃を受けてしまう。

丁茶山は流刑地の康津（カンジン）で失意の生活を送るが、その地で出合ったのが、白蓮寺の恵蔵禅師であり、茶を勧められ精神の平衡を取り戻し、茶山草堂を建てて、学問に専念するようになつた。茶山の号はこの草堂に由来する。

韓国に茶道はなかったと言うが、もし韓国で茶道と言えば、茶山が第一人者であり、近年はその面でも注目されている。

そこにソウルに残された妻からの手紙が届く。嫁入りの時に着たチマを裂いてそこに哀切の情を綴った手紙であった。この話は、今でも韓国の人の心を打つエピソードとして良く知られている。

どうも必要以上に椒斎と無関係な丁茶山に深入りしてしまったかも知れない。しかし、本当に書きたかったのは茶山が椒斎と同じ意味での大学者だったことである。

七十五歳で亡くなった丁茶山は、前述したように、儒学から始まり、天文学、歴史、地理、数学、政治、社会、経済、医学、そして建築や造船などの工学に至るまで、実に五百八巻にも上る膨大な著書を残している。彼の漢

詩集も高い評価を得ていると言うし、更に言えば、はしかと天然痘に関する治療や予防法についても紹介している。それは日本で緒方春朔（しゅんさく）が、初めて人痘種痘書「種痘必順辨」を著したのに遅れること五年であった。

実学というのは、日本で言えば江戸後期の儒学や国学と同じ立場にある。伝統的な朱子学を批判し、近代的、科学的、合理的な精神を基にして、社会変革を育む性行のものである。

その集大成者である茶山は、実事求是の姿勢で、当時の日本についても研究し、日本で興った古学、荻生徂徠や太宰春台を絶賛している。当時の朝鮮の知識人と言えば、日本を学問水準の低い国と観念的に理解をするのが一般的な中で、茶山はまったく偏見に囚われなかった。

もっとも、事実をしっかりと見さえすれば、当時の江戸は既に世界最大の百万都市だったのに、ソウルは名古屋よりもさびしい二十万弱の都市であったのであるから、朝鮮通信使たちも、日本の水準については、十分に承知していたはずである。その後の西欧人の旅行記を見れば、ほとんど例外なく日本に甘く、朝鮮に厳しい評価を与えているのであるから、通信使だって感じなかった訳が無い。しかし、李朝のエリート達は正しく学ばなかった。

その中で、茶山は朝鮮通信使が持ち帰った書物を精読して、むしろ日本が学問的に朝鮮を凌駕していることを認め、朝鮮の実状を嘆いているのである。しかも、注目すべきことに、その原因について、日本には科挙制度がないことを挙げているのである。

茶山が絶賛した古学とは、朱子学や陽明学のような新しい観念的な儒教を排し、理論よりも事実を重んじ、形式的な道徳よりも自然な人情を尊び、実生活での積極的な活動を重んじる学派であり、実学と共通する点が多々あった。古学が新儒教を排するために古典に依拠しようとしたことも、同じ学者として共感を呼んだに違いない。

ところで、日本が明治維新によって欧米に半周遅れながら、付いて行けたのは、教条的な朱子学を脱し、古学が興り、実証的な考証学や、鎖国下にありながら、蘭学が盛行していて、西洋文化のみならず西洋思想も容易に受け入れる環境を既に持っていたからである。

それに対して、李氏朝鮮は合理性、実証性、実用性を求めた実学を丁茶山とともに葬り去ってしまった。もし、正祖が急逝することがなかったなら、そして茶山が政権の座に付いていたなら、朝鮮は明治維新後の日本に続いていたかも知れないのである。

狩谷棭斎讃歌（七）

新井宏

（二十二）和名類聚抄箋注

棭斎の代表作『和名類聚抄箋注』の初稿執筆に取り掛かったのは、文政五年（一八二二）正月である。寛政十二年に校読を開始してから二十二年の歳月が過ぎ去っていた。

『和名類聚抄』は承平年間（九三一～九三八年）に、源順が編纂した漢和辞典であるが、内容的には日本初の百科事典ともいうべきもので、漢語を「類聚」して万葉仮名で和語の読みをつけていて、日本語の語源を知るに必須の書である。棭斎の箋注によって、我が国の古語の意味が定まったのは数え切れない。現代に至っても、諸説ある語義の紹介のほとんど全てにまず棭斎の名が出てくる。

この『和名類聚抄』には、十巻本と二十巻本が伝わっていたが、原本は既に失われていた。しかも、百科事典としての性質上、常に時代に合うように更新されたため、写本には挿入や異説が極めて多かった。源順の原本を正確に復元することは、日本の古代を研究するに必要欠くべからざる作業であった。

ここで棭斎の素晴らしい研究姿勢が遺憾なく発揮される。通常なら、校訂者が正しいと信ずる内容に修正するのが当時の慣わしであった。しかし、棭斎は十巻本七種と二十巻本四種を徹底検証して、二十巻本にあって十巻本にない職官や国郡の記述から、十巻本原撰説を唱え、この十巻本について、書写の誤りや書写者の意識的あるいは無意識的な改変は正したけれど、内容の過誤については、類書を校閲しながらも、箋注を施すに留めたのである。誤りの中には、諸本の錯誤もあろうが、源順が原本を作成した際の誤りもあり得るからである。

貴重な古典は、その内容のみが研究対象となるわけで

はない。意図せざる目的のために、重要な情報源となる場合がある。楓斎の研究態度は、まさに近代の文献学の認識そのものであり、その意味では、契沖の『万葉代匠記』、本居宣長の『古事記伝』を凌駕して近世注釈の最高峰に位置するものであった。

『和名類聚抄箋注』は、翌文政六年（一八二三）に、いったん初稿が完成するが、文政七年には、早くも再稿に取り掛かっている。再稿の完成は、大病を患うなどの事情もあり、文政十年になった。ところが、楓斎はその再稿にも満足しなかった。時期は明らかではないが、三稿を纏め上げて、死の直前には出版の段取りを整えていた。

しかし、おそらく津軽屋の経済的な事情、すなわち津軽藩に対する金十二万七五六九両の巨額債権を放棄したことによる困窮のために、見本刷まで行っていながら、出版は取りやめとなってしまった。この時に終稿を整理して、楓斎の没後も浄書などに従ったのが、渋江抽斎である。森鴎外の小説『渋江抽斎』では、そのことに触れていないが、抽斎のこの整理が後に役立った。

結局、『和名類聚抄箋注』が、楓斎の薫陶を受けた最後の弟子、森立之（枳園）によって内閣印刷局から出版されるのは、楓斎没後四十八年たった明治十六年（一八八三）である。渋江抽斎は文化五年生まれ、森立之も文化七年生まれで、共に医学を伊澤蘭軒に学び、儒学等を楓斎から学んでいる。森立之は『傷寒論』を書き明治の考証医家の第一人者になった。渋江抽斎は森鴎外の名作史伝小説で世に残った。

『和名類聚抄箋注』には本文に十倍する箋注が付いた。百科事典であるから当然ではあるが、天文・気象・神霊・水・土石の項目から、人間・家族、体、病気、武芸・武具、住居・道路、船・車、金銀・玉石、布、衣類、食物、器・皿、燈火、日用品、鳥、獣一般、牛・馬、爬虫類・両生類、魚類・海棲動物、虫類、稲・穀物、野菜、果物、草木に至るまで、膨大な記事について、本文、箋注部分ともに万葉仮名を含めて全て漢字で書かれており、余程の知識がないと読むことができない。

私も、研究者が引用している部分を拾い読みするのが精一杯であるが、ある水生生物の学者が魚貝類の和名の歴史を調べていて、現代の学者は、和名類聚抄に言及することはあっても、箋注を精読している様子がなく、楓斎が有力な新説を提示しているにもかかわらず、専門辞書類にもほとんど採用していないと嘆いていた。それは、楓斎を無視しているというより、難解さによるらしい。

確かに、わずか「一字」の校異にさえ、稿本、写本を徹底比較検討するだけでなく、中国の原典にまで当り、原典と一致しているからと言って、それを正とするのでなく、後世に誰かが訂正した可能性まで論じているのであるから、本文に十倍する箋注となったのも無理が無い。そこに示された膨大な古文献からの引用の方が実用的な

価値が高いと言われているほどなのである。

なお、桛斎は二十巻本を原撰ではないとしたが、その成立はかなり古いと考え、歳時、楽曲、薬名、官職、国郡、殿舎の六部門についても箋注をつくり本編十巻の付録とした。その中には、澤田吾一が名著『奈良朝時代民政経済の数的な研究』で活用した諸国の郷名や田積もある。そこに記載された郷名が、出雲風土記、豊後風土記、播磨風土記などの古い記録とほぼ一致していることから、奈良時代の人口や耕地面積を初めて算出したものである。澤田吾一は桛斎の『本朝度量権衡攷』からも多くを学んでいる。

ところで、百科事典といえば、普通は新しい版に価値がある。しかし、論文や著書を書く時、役に立つのが旧版である。同時代にどのように理解されていたか、最も簡単に参照できるのが百科事典だからである。旧版の百科事典など、置き場所に困るが、時を経た百科事典は研究書として貴重なのであるから、図書館は留意してほしい。

似ているものに、会社役職員録がある。

（二十三）　慊堂日暦

桛斎が『和名類聚抄箋注』に着手した翌年の文政六年（一八二三）四月から、松崎慊堂の『慊堂日暦』が始まる。いや正確には全二十四冊の内、第一冊と第二冊を欠くから、本来は文政初年頃から書き始められた日暦であるが、この頃から桛斎との交流が正確に参照できる。

桛斎の生涯の友、松崎慊堂については既に書いたが、この『慊堂日暦』（東洋文庫より山田琢訳注によって六巻として出版されている）が、江戸後期の歴史研究に裨益したことは計り知れない。社会の事件、見聞の記事、諸説の覚書、交友記事や人物録、その他には、家計簿的な備忘録までが丹念に書きとめられている。後世に伝える意図がなく、ただ徹底して書き綴った性質のもので、慊堂の人柄が良く現れている。

この『慊堂日暦』に登場する人物は、新聞記事のように実に多彩である。しかし、その中で一貫して最も多く登場するのが桛斎なのである。例えば、『慊堂日暦』の始まる文政六年四月十四日には「晴。桛斎を訪い、語ること終日。夜帰る」とあり、平均すると月に一、二回は必ず登場している。最も多く登場した文政九年などは年に五十回以上も桛斎の名を見る。

時には「余と桛斎の交わりは銅臭に近しと知る」とか「余（慊堂）が翁（桛斎）に於けるは、翁の有るところは、余は必ずしも有らず、翁の無きところは、必ずしも無からず、有無通共し、洵（まこと）に心に逆うことなきなり」などと桛斎との仲を吐露している。

社会的な事件としては、天保八年（一八三七）二月十九

日に大阪で起きた大塩平八郎の乱についても、十日後には正確に記載しているし、蕃社の獄については、既に述べたように、慊堂自身が渡辺崋山の助命に奔走した様子を随所に記している。

また、氏名と簡単な覚書を付した人物録が多彩である。大塩平八郎については、短いメモながらも、事件の十年前に二回も記されている。それだけ気になる人物だったのであろう。慊堂が天保十年（一八三九）八月末から箱根に遊んだ時には「小林専次郎。上総の人、自ら言う、まさにアウステウリン国に入りて覇王にならんとすと」などとあり驚く。この記事の少し前に、高野長英の夢物語に続いて、続夢物語、続々夢物語が出ていた様子が記されていることから見ると、尚歯会の関係者であろうか。

同じく箱根滞在中に、二宮金次郎について次のように記している。やや長文であるが、簡潔なメモであり、現在でもそのまま使えそうなので原文で示す。

二宮金次郎。小田原在柏山村の人、小にして小田原の家士に仕え、その主の貧しき者をして大いに富ましむ。邦君は遂に命じて仕籍に入らしめ、格録は代官に比す。その富をなすの法は、己を節すること百度、余すところを以て人に施す。人に施す法は、貸すを以て名となす。借りる者は必ず諭すに立産の道を以てし、三令五申してこれをして必ずその説を奉じて易えること能わざらしめて、しかる後に貸す。その人は産立ちてしかる後にその借りるところを償う。その償うところを以て、またこれを別人の窮する者に貸すにまた前法のごとくす。毎に云う、人は積貯を以て子孫に遺すべからず、ただこれを他人に施す、すなわちこれ子孫のための地なりと。

天保十年は、天保の大飢饉の後で、二宮金次郎は烏山藩を救済し、下館領の復興に取り掛かるなど諸藩、諸村の復興指導で多忙な日々を送っていた。相馬藩士の富田高慶が入門をやっと許可されたのもこの頃である。この記事の後に、下野国桜町領の旗本宇津半之介の名もあるので、その関係者からの話を記録したのであろうか、それとも既にこのような文書が小田原では流布していて、それをメモしたのであろうか。

それにしても、慊堂の心に共鳴するものがあったからであろう、『慊堂日暦』の中では異例の長文なのである。慊堂は偏見にとらわれることの少ない人物であった。

（二十四）　桜斎の三角縁神獣鏡

『慊堂日暦』に関連して、ぜひ紹介したいことがある。それは桜斎の持っていた三角縁神獣鏡のことである。

私は永年、考古学の研究にどっぷり浸かっているが、その中でも三角縁神獣鏡の研究は主戦場のひとつである。三角縁神獣鏡を、卑弥呼に下賜された魏鏡とする説

と、中国での出土例がないことから国産とする説が対峙し膠着状態になっている中、私は鉛同位体比の解析という異色の手法によって魏鏡説を否定した。その帰趨によっては、邪馬台国論争ばかりでなく、日本の古代国家像も大きく変わってしまう可能性のある論争について、いわば当事者になってしまった訳である。したがって、三角縁神獣鏡については、どんな些細なことでも関心を持っている。

三角縁神獣鏡は、古墳時代前期の大型古墳を中心にして、既に五百面以上出土しているが、その中にはいわゆる「同笵鏡」が百二十種ほどある。その同笵鏡の分有関係から京大の小林行雄は壮大な大和王権説を描いたが、三角縁神獣鏡が卑弥呼の鏡でなくなると、部族連合的な国家を経て大和王権が成立したことになり、統一国家成立時期が大きく変わってしまう。

三角縁神獣鏡の魏鏡説、国産説については、議論が進めば進むほど、定説として君臨していた魏鏡説に、情緒的な証拠しかないことが判ってきた。その情緒的な証拠の最たるものが銘文である。その頃の日本で、漢字を使って立派な銘文を書けるはずがないとの意見である。

確かに、三角縁神獣鏡には、一定の四言句、六言句、七言句などを入れた長文の銘文を持つものが約五十種もある。それらが古墳時代の初期に日本人によって書かれたとは思えないとの意見に同感できる。ところが、三角縁神獣鏡が流行したのは日本だけである。流行ブランド品にイミテーションが作られるのは世の習い。よく見れば、定形句のほとんどが、漢代に流行した鏡から直接、あるいは変形して採っている。

しかも、定形句の寄せ集めや変形を主とした銘文の集合でありながら、中国音韻学の森博達（ひろみち）は銘文自体が押韻を無視し平仄の合わないものばかりで、魏が下賜鏡として、こんな稚劣な鏡を作るわけが無いと云う。

実は、『慊堂日暦』には、柧斎の所有していた七、八面の鏡のことが繰返し出てくるが、その内の二面が銘文を持つ三角縁神獣鏡なのである。

江戸の巷間に伝わった話であるが、柧斎は自ら六漢老人と称していた。漢鏡、漢銭、王莽の威斗（一振りで数万の軍勢を追い払うことができる軍配のようなもの）、中平の雙魚洗、三耳壺を愛蔵していたからであるが、それでは五漢ではないかと言われると、自分は漢学を修めているからと答えるのがオチであった。慊堂も柧斎が六漢老人と称していたことを伝えている。

『慊堂日暦』における漢鏡記事の初出は文政九年（一八二六）の十月である。慊堂は柧斎宅で、前漢三、後漢四、六朝一、唐一の古鏡を観て墨拓を刷り、前漢の仙人不老鑑、仙人無双鑑、後漢の尚方鑑の銘文を記録している。その記事の前に、柧斎が王莽の斗を得たことも書いているので、柧斎の所有と見て間違いないであろう。

ところが、四年後の文政十三年九月の記事に「正斎の鏡。近藤正斎が事を起す前、古鏡を持って椀斎宅に赴く。その後に事おこり、その鏡はゆくところを知らず。家人はこのことを以て余に嘱し、八日に訪問せり」とあり、近藤正斎すなわち近藤重蔵の所有物であった疑いも生ずるのである。その翌年の天保二年九月にも「近藤正斎の小妻来り、古鏡のことを説く。椀斎に与うる書を作りこれに付す」とあるし、続いて同年十一月にも「近藤正斎の内人はその次児熊蔵とともに来り、正斎が蔵せる大小升(古鏡)を売らんと欲す」とある。どうやら近藤正斎の鏡を巡って、問題があったようなのである。

近藤正斎が「事を起こした」と云うのは、文政九年(一八二六)五月に長男の近藤富蔵が隣地争いで町民を殺害して八丈島に流罪となり、連座した正斎が天保十二年六月に獄死した事件である。すなわち、事件後ほどなくして椀斎が漢鏡を慊堂らに見せていること、正斎が獄死して間もなくその家人が慊堂を訪れていることなど、気になる一致があるのである。

しかし、近藤正斎と椀斎の関係については、既に述べたように、正斎が椀斎から借用した『皇清経解』を売り払ってしまったが、それを見つけた椀斎がそっと買い戻しておいたところ、もう一度借用を申し込んできたという巷説があるほどで、書誌学者の川瀬一馬も椀斎が正斎の遺族に対して手厚くしていたと述べている。

おそらく実情は、正斎が持っていた漢鏡を椀斎が既に買い受けていたのではなかろうか。それは、椀斎が亡くなって一年半経った天保七年(一八三六)末から再び『慊堂日暦』に、椀斎の漢鏡の売買交渉が出てくるからである。

その頃、椀斎没後の津軽屋は、津軽藩への巨額の債権を放棄して苦しみ、蔵書などを処分していた。それを手伝っていたのが、慊堂や伊澤蘭軒・柏軒の父子、そしてこの頃柏軒と結婚したばかりの椀斎の娘たか女である。しかし思うように換金できず、漢器鏡も加えることを考えた。「求古(椀斎)の後人(懐之)は、(中平の)双魚洗、三耳壺、(王莽の)威斗、漢鏡(六、七面)を三百両で」売ろうと考えたようである。

その後、実際の買い手としては、浜松侯水野忠邦が現れたようであり、代理人として儒者の小田切藤軒(要介)が事を進めた。藤軒は慊堂の弟子で、交渉は翌年の三月初から始まり、五月になってまとまった。その間の、関係者のやり取りを慊堂が断片的なメモでこまめに伝えている。とにかく、鏡が水野忠邦の手に帰したらしいことまで判ったが、その後の鏡の行方はわからない。

そんなことを調べている内に、蕃社の獄で罪に落とされた渡辺崋山の書簡の中に、「小田海松」の奔走に感涙に耐えないとあるのに出合った。小田は小田切藤軒、海は掛川藩の儒者で慊堂の弟子でもある海野豫介、松は松

崎慊堂のことである。後に慊堂が老中水野忠邦に上書して全文三千字におよぶ崋山無罪論を訴え、忠邦を動かしたのも実は小田切藤軒を通じてであった。

しかも渡辺崋山の日記によれば、獄の直前に小田切藤軒を訪れた際に、その蔵する古物を見たと書いている。その古物が鏡であったとするなら、水野忠邦が求めた鏡を小田切藤軒が預かっていたことになる。

随分、横道に逸れて、漢鏡の去就を追いかけてしまった。しかしその事よりも、幸いだったことは、慊堂は求古楼(椒斎)の古鏡の九面の明細についてサイズと銘文を記録していたことである。だからその中に三角縁神獣鏡を二面確認できるのである。研究論文を書いているのではないから、面倒な手続きは省略して先に進もう。

まず仙人不老鑑が七寸二分で二十一・七センチ、三角縁神獣鏡の最も多い寸法であり銘文が次のようになっている。句読点は他の銘文を参考にして七言句で示す。

吾作明鏡甚大好、上有東王父西王母、仙人王喬赤松子、渇飲玉泉飢食棗、千秋万歳不老、　由天下兮由四海兮

この銘文は、(伝)奈良県山辺郡都祁(つげ)村出土および京都府の椿井大塚山古墳から出土した同型鏡の三角縁銘帯五神四獣鏡の

吾作明鏡甚大好、上有東王父西王母、仙人王喬赤松子、渇飲玉泉飢食棗、千秋万歳不知老兮

と最後の句が異なるだけであり、最後の部分については(伝)奈良市大和田町富雄丸山古墳と出土地不明の同型鏡である三角縁環状乳四神四獣鏡の

吾作明鏡甚大好、上有仙人不知老、渇飲玉泉飢食棗、由天下至四海、(以下略)

と似ている。いずれにせよ、新から後漢に流行した方格規矩四神鏡で最も多く使われた定型句である。

また仙人無双鑑は六寸五分で二十センチであり、これも三角縁神獣鏡の範疇にあり

吾作明鏡甚大工、上有王子喬赤松子、天鹿其麟龍、天下其万世無双

と云う銘文を持つ。これは福岡県南原石塚山古墳、広島県中小田一号墳、大阪府三矢万年山古墳および京都府椿井大塚山古墳から出ている同型鏡の三角縁銘帯四神四獣鏡の

吾作明鏡甚大工、上有王喬以赤松師子、天鹿其義龍、天下名好世無双

の銘文と良く似ている。ついでながら、「其義」は椒斎や慊堂が読んだ如く、麒麟の方が正しい。しかも、麒麟の句を含む鏡は中国に全く見出せないので私が注目している銘文なのである。

いずれにしても三角縁神獣鏡には知られていなかった組み合せの銘文が現れたのである。現在知られる三角縁神獣鏡の同笵鏡は百二十種類ほどで、もはや新型はほと

んど出ないだろうと言われていた。最近、新たに発見された三角縁神獣鏡のほとんどが既に同笵鏡を持っていたからである。そこに椒斎の二面が加わるわけである。

学問的には大きな発見であるが、今までにそのことを発表した研究者はいない。ただ、私が平成十二年に金属系の情報誌『バウンダリー』に紹介したことがあるが、それは歴史・考古学系の専門誌ではない。

いずれにしても、椒斎が鏡を入手したのは、文政九年（一八二六）よりも前のことであり、あるいは青柳種信が井原鑓溝で銅鏡三十五面の記録を作成した文政六年よりも早かったかも知れないのである。そうであれば、椒斎が最初の銅鏡の調査者であったと言えるのであるが、もうこの辺で止める。

（二十五）椒斎の三角縁神獣鏡の後日談

ちょうど、ここまで書き終えた頃、椒斎の三角縁神獣鏡の銘文について、畏友、漢詩人の鯨游海氏が主催する会で紹介したことがある。森博達の指摘について、漢詩の平仄や「二四不同」の規則を学びながら、再確認しようとの心積もりであった。

ところが、そのことが契機となり、一般の銅鏡の銘文についても、データベースを作ってみようと思い立った。いつものことであるが、データを収集しておくと、思わぬことで役立つ。銘文を詩文として本格的に研究した考古学者はいないからでもある。

ところが、そのことがまたしても、椒斎の三角縁神獣鏡との貴重な出会いの契機になった。それは、今では日本における銅鏡研究者の第一人者として知られる森下章司氏が平成十六年に書いた論文「古鏡の拓本資料」の中にあった。

森下氏とは三角縁神獣鏡の研究を通じて旧知の仲であるが、彼が京大に保存されている椒斎蔵印の「尚方鑑」の拓本について紹介をしていたのである。もっとも私もその拓本の存在については耳にしていた。しかし、「尚方鑑」は三角縁神獣鏡ではなく、いつしか忘れてしまっていた。ところが、森下氏の論文で、その詳細が判明したのである。良く見ると、天保八年三月汝圭所贈とある。

天保八年三月は椒斎の鏡の売却交渉が始まったころである。森下氏は気付かなかったが、汝圭は三好汝圭（横田汝圭）のことであり、天保十八年に七十八才で亡くなった江戸後期の画家である。尚歯会のメンバーであったから、椒斎、慊堂、崋山などとも当然交際があった。

そんなことに気付いただけでも嬉しかったが、森下氏は椒斎の三角縁神獣鏡にも気付いて、論文の末尾に追加して紹介していた。それは、拓本の論文を作成している際に、考古学史研究の立場からモノ集めをしている内田好昭と云う方から『慊堂日暦』に椒斎の鏡のことが出て

いると教示を受けたことによる。内容的には私の掴んでいた情報を越えるものではないが、嬉しさもあって、早速、森下氏に電子メールを送った。

森下氏も私が狩谷棭斎に拘っていることにびっくりしたと云うが、そこで更なる貴重な論文を紹介された。宮内庁書陵部の徳田誠志氏が平成十九年に『関西大学博物館紀要』に書いた「描かれた三角縁神獣鏡―『千とせのためし』所収狩谷棭斎旧所蔵品について―」である。

徳田氏がこの論文を書いたのも全くの偶然であった。氏の勤務する宮内庁書陵部の堀を挟んだ向いに国立公文書館があり、昼休みに折からの展示会に立ち寄った時に、ケースの中に、図譜に描かれた三角縁神獣鏡を見つけたのである。こんな所で専門分野の史料を発見するとは、まさに青天の霹靂だったと云う。

『千とせのためし』は古筆、古画、古器物を掲載した考古図録で、この図録を編集したのは水野忠央（ただなか）である。忠央は紀州藩の家老であったが、禄高は和歌山県新宮の三万五千石で大名格。井伊直弼と組んで、第十四代将軍に紀州藩主の慶福を送り込むのに成功した人物である。

私が日本金属工業に勤めていた頃、何かと目をかけて下さった常務の水野誠氏は新宮水野家の直系で水野忠央の曾孫に当たる。そんな縁にもびっくりするが、図録は銘文から見て棭斎所有だったものに間違いない。

水野忠央は古典籍の蒐集家であり、水野忠邦から入手した可能性もある。彼は同族の水野忠邦に刺激されて中央政界に出た人物であるから、忠邦が大老の頃、接触があった可能性は高い。あるいはこの図録は三好汝圭の筆になるものかも知れない。ただし、私は近藤正斎が紅葉山文庫の時代に書かせておいた図録が、紅葉山文庫経由で忠央に伝わった可能性も捨てきれない。

いずれにせよ、今回の徳田誠志氏の発見により、棭斎の三角縁神獣鏡に図柄がほぼ一致する同型鏡が奈良県の佐味田宝塚古墳から出土していたことが判明した。この佐味田宝塚鏡は破片であり、完全な銘文を知りえないが文様は五神四獣鏡に属し「同笵鏡」と見なせるほど良く一致している。ただ、奇妙なことに、銘文の書き出し位置が両者でちょうど百八十度ずれている。良く見ると鈕孔の位置も異なる。これが三角縁神獣鏡の特徴だというのが、三角縁神獣鏡を国産とする立場なのであるが、それにしても奇妙である。

しかも現在の様式推移の研究から言えば、三角縁神獣鏡の様式としては最古に属する。三角縁神獣鏡について魏鏡説を採る立場から言えば、まさに卑弥呼に下賜された鏡である。

棭斎はそれをお見通しだったのであろうか。

森下章司氏は、棭斎や慊堂の動きに、大正期の富岡謙蔵に先立つ「古鏡年代推定法の萌芽」があったかも知れないと述べている。これも嬉しい。

狩谷棭斎讃歌（八）

新井宏

（二十六）本朝度量権衡攷

いよいよ『本朝度量権衡攷』について書く時がやってきた。この書物について語りたいがために、書き始めた小稿でもある。我が想いをどう伝えようか。あれもこれも書きたい。だから、ほとばしるように書けるはずであった。しかし事実は、ここで筆が止まってしまったのである。この項目だけは何とかうまく書きたいという意識が、重くのしかかってきて、最初の一行が書けない。

関連する論文は、既に十分に書き上げた。棭斎の「律令期の大尺小尺が唐の大尺小尺と同じであつた」とする考察が、やはり正しかったのである。後世の歴史学者や考古学者がともすれば棭斎の説を採らず、「令大尺は高麗尺、令小尺は唐大尺」としているのは皮相的な見方であった。だからそのことを書くだけでも、狩谷棭斎讃歌になり得る。

ところが、そもそも「律令期のものさし」などについて簡単な知識を持っている人さえ珍しい。どうしても、解説をしながら書くことになる。それは論文を書くのに数倍する難しさであり、もたもたしていては、途中で放り出されてしまう。なんとか読んで下さる方を惹き付けて書きたいと思うと、また筆が止まってしまう。

しかし、何はともあれ第一歩を踏み出さねばならない。

まず、江戸時代における度量衡研究が、現在ほどマイナーな存在ではなく、度量衡考を書いた学者が極めて多かったことから始めよう。

江戸中期を代表する儒学者・思想家・文献学者の荻生徂徠（一六六六～一七二八）は大部の『度量衡考』を書いている。それ以前にも、儒者ながら天文地理、度量衡、

音律にまで精通した中村惕斎（一六二九～一七〇二）は『律尺考験并三器攷略』を表し、同じく儒者の伊藤東涯（一六七〇～一七三六）も『制度通』で尺度論を述べ、国学者の荷田在満（一七〇六～一七五一）は『度制略考』を書き、平田篤胤（一七七六～一八四三）も『皇国度制考』で独特の尺度論を主張している。それに加えて、関流和算家中根元圭（一六六二～一七三三）は数学者の立場で『律原発揮』を書いている。著名な学者はみな度量衡に深い関心を抱いていたのである。

それは、もちろん儒学で盛に「律の高低は国の興亡にかかわる」と言っていたことに関連している。律とは音程のことであるが、音程を決めるのが尺であり、尺度のことも律と称していた。したがって、律の乱れが国の興亡にかかわると言うのは、尺が乱れると耕地面積から租米の収量まで乱れ、社会が不安定化するとの意味でもあったであろう。秦の始皇帝による度量衡の統一が、如何に大事業であったかを思い起せば、ある程度の納得が行くであろう。

ちょうどその頃、すなわち十八世紀末にはヨーロッパでもメートル法への動きが活発化していて、度量衡制度の統一やそれに関連した歴史研究が大きな関心事になっていた。

梶斎の没後、平田篤胤が「尺座」を設立しようとしたのも、一連の流れとして理解することができる。「枡座」「秤座」によって、まがりなりにも量と衡については管理されていたが、比較的に安定していた「度」について管理されていなかったことに着眼して、篤胤はある種の利権を企画したのであろうが、時代の流れに沿った動きでもあった。明治になってメートル条約が締結されてから十年後に、いち早く同条約に参加したのも、これらの流れが基盤にあったからである。

『本朝度量権衡攷』の生れた時代背景説明にすこし力を入れすぎたかも知れない。それは梶斎の業績を現代の感覚では見て欲しくないという私の願いに他ならない。それにしても、これら数多く生れた度量衡考の中でも、狩谷梶斎の『本朝度量権衡攷』は質も量も他を圧倒していた。

平凡社の東洋文庫に収録された冨谷至氏の校訂版で見ても、注釈を含めば六百ページを越す大著である。梶斎はこの大著を四度にわたって書き直したというが、それでも満足せずに、結局、生前に公刊されなかった。それは『和名類聚抄箋注』の場合と良く似ている。公刊されたのは一九一六年になって滝本誠一編の『日本経済叢書』の巻三十に集録されたのが最初である。

『本朝度量権衡攷』は、本編として、本朝度攷、本朝量攷、本朝権衡攷、附録として、巻上之上、巻上之下、

巻中、巻下之上、巻下之下、図譜、沿革表から成っている。

梘斎は『本朝度量権衡攷』の研究の動機について、附録・巻上之上の冒頭で次のように述べている。

予、弱冠の頃より、皇国の制度を知らんと思ひて、歴史・律令・格式などくり返し読むに、知り難き事の多かる中に、度量権衡は今も日々用ふる物ながら、今と古へと同じかりしや、異なりしや、たしか知らねば、先達の人々に問ひ質ししに、委く教ふる人も無かりしかば、その筋の事、書けるものども、彼れ是れ取り集めて読み見るに、能く考へ明らめたりと見ゆるも、をさをさ無かりければ、何くれと尋ね求めて考へしに、皆な李唐の制を写し給ひしなりけり。……

実は、ここに示されている極めて平凡な見解、すなわち「皆な李唐の制を写した」と言うのが梘斎の重要な結論なのである。

その程度の結論ならば、素人でも出せそうなのに、梘斎は心血を注いだ精緻な研究によって導いた。それは、梘斎以前の学者が別の見解を持っていたからである。しかも、現代の歴史学者や考古学者は、梘斎の結論に批判的であり、むしろ梘斎以前の学説に戻ってしまっている。これを再び梘斎の結論に回帰させなければならない。それが私の終生のテーマなのである。

要は、律令制定時の尺度、すなわち「令大尺・令小尺」が「高麗尺・唐大尺」に対応しているか(A説)、「唐大尺・唐小尺」に対応しているか(B説)の二説があり、対峙しているのである。ただし、はっきりしているのは、和銅期以降になると、「大尺は唐大尺、小尺は唐小尺」が確立されていたことである。そうなると、どうでも良い論争と思われるかもしれないが、その帰趨によっては日本の古代像が大きく変わるのである。

ここで中国と日本の尺度の歴史を簡単に紹介しておこう。

中国では、前漢・後漢期のものさしが百本ほど発見されていて、漢の時代、一尺が二十三・三センチメートル前後に安定していたことが判っている。ところが、三国時代になると北方民族の侵入等によって、尺度が乱れ、徐々に長くなり、東晋の頃には二十四・五センチメートルほどになり、更には隋や唐では一尺が二十九・七センチメートルほどのものさしが常用されるようになる。しかし唐では二十四・五センチメートルほどのものさしも一部で使われていたのでこれを小尺とし、二十九・七センチメートルほどのものさしを大尺として、小尺と大尺の間に、一対一・二の関係を規定した。

日本の律令期は唐の時代であり、遣唐使などを通じて

入ってきた尺度は唐の大尺である。この唐大尺はやがて天平尺と呼ばれ、時代の経過と共にやや長くなり、曲尺と言われる頃には三十・三センチメートルほどになる。長くなったとは言え、世界で最も安定していたものさしである。それだけ日本の社会は安定していたと言うことであろう。ちなみに、中国においては、唐の大尺は清の頃、三十二センチメートルほどまで長くなっている。

さて本題に戻る。このあたりからは、読んでいただきたいから書くのではなく、ますます、書きたいことを書くことになる。いわば自己満足。それが讃歌の特徴なのだと割り切っている。

自明と思われる梜斎の結論がなぜ受け容れられないかには、当然大きな理由がある。それは、大宝令の条文と和銅六年二月十九日の和銅格を忠実に比較して読むかぎり、令小尺が唐大尺であり、令大尺は唐大尺の一・二倍（多くはこれを高麗尺と称する）であったと理解するのはある意味で当然なのである。梜斎より前の学者、例えば荷田在満もこのA説を採っていた。

大宝律令は大宝元年（七〇一）に唐の永徽（えいき）律令（六五一年制定）を参考にして制定されたと考えられている。

その編纂の起源は天武天皇の詔（六八一年）まで遡り、まず行政法・民法に相当する令として、持統三年（六八九）に飛鳥浄御原（きよみがはら）令が発布され、後に刑法に相当する律が加わって成立した日本初の本格的な律令である。しかし原文は現存しておらず、『令集解』の古記によって、七五七年に施行された養老律令におおむね継承していることが知られていて、それを元にして大宝律令の復元が行われている。大宝令の前に飛鳥浄御原（きよみがはら）令もあり、区別できない場合もあるので、通常はただ「令」と言っている。

その令の雑令には、度量衡の項があり、尺度に関して次の三点を規定している。

① 凡そ度は十分を寸とせよ。〈……北方の秬黍の中の者、一黍の広さを分とせよ……〉。十寸を尺とせよ。一尺二寸を大尺とせよ。十尺を丈とせよ。

② 凡そ地を度り、銀銅穀を量る者は、皆な大を用いよ。この外は官私黍く小なる者を用いよ。

③ 凡そ地を度るには五尺を歩とせよ。三百歩を里とせよ。

ところが、令の制定から十二年後の和銅六年二月十九日の格で、③の項について早くも「六尺を歩」とするように改定される。解説によれば、五尺の歩も六尺の歩も同じとされているので、ここに言う六尺は令小尺によるものとなる。しかも、和銅以降は、唐大尺の六尺が歩であったことは誰でも知っていた。ここに令小尺が唐大尺、

令大尺が唐大尺の一・二倍(これを高麗尺と通称)と決まる。だから荷田在満のいう通りなのである。

しかし、梜斎は、詳細な検討を経て令の規定には唐令導入時の混乱があったとし、「令大尺は唐大尺、令小尺は唐小尺」のB説をとったのである。

その根拠のひとつは、①の規定と全く同文が唐令に見られることである。〈……北方の秬黍の中の者、一黍の広さを分とせよ……〉などと言う定義は、日本独自のものではありえない。定義から言えば、無条件に、令の大小は唐令の大小である。もっとも、この北方の秬黍の規定は『令集解』にあるだけで、当初の大宝令にはなかったとの見解もある。

もうひとつは、日本では唐大尺の六尺を歩としたにもかかわらず、③のように「五尺を歩とせよ」と唐令と同じ規定にしていることである。そのため、唐大尺の一・二倍の令大尺(高麗尺)を規定して辻褄を合わせる必要が生じた。しかし、このような辻褄合わせは長く続かず、和銅格によって「六尺を歩」と変えることになってしまった。すなわち、令小尺が「地を度る」基準にも使われるようになったのである。令大尺は「地を度る」場合にのみ使う規定であったから、令大尺はどこかへ行ってしまった。

しかも、天平期の大小尺が唐の大小尺であったことを梜斎は詳細に実証している。そうであるならば、大宝から天平の間に、令の大小尺を廃して、唐の大小尺を新たに採用したとする「格」が発布されていなければならないが、どこを探してもそんな記録は無い。それは、最初の錯誤を、そっと目立たぬように直しておいたと理解すると良い状況なのである。

時間的に見ても、唐尺が入ってきたのは大宝令よりも五十年近くも前のことで、前期難波宮は確実に唐大尺で作られている。だから大宝令の前も後も唐制なのである。

したがって、梜斎が主張するように、令の当初の規定は、錯誤に近いもので、実質は唐制と同じであったとする見解は極めて合理的なのである。そうであれば、唐尺の一・二倍の令大尺は全く実体のない机上の尺度に過ぎなかったことになる。この主張が梜斎の考えの真意なのである。

しかし、錯誤があったとしても、いったん制定されれば、法は法であり、これがある程度まで実施されたことは否定できないであろう。だから、表面的には荷田在満のA説が正しく、実質的には梜斎のB説が正しいというのが、結論となるが、その程度の相違ならば、大きな問題ではなかった。

むしろ、梜斎のB説が無視されA説に回帰するようになるのは、現代になってから、大化前代の土地制度研究をめぐって、唐大尺の一・二倍の高麗尺が注目を浴びるようになったからである。すなわち、大化前代には代制

という土地制度があり、その五十代(束代)が一段に相当していた。しかし令の一段の規定は三六〇平方歩なので、代との対応関係は良くない。ところが、高麗尺の六尺を歩とすると、段は二五〇平方歩になり、代が五平方歩に対応することになる。そこから、令前には高麗尺が用いられていたとの学説が有力化したのである。

しかもそれを支えたのが、和銅格の改訂をめぐって、令集解田令田長条古記に記載された「問答」である。その中に、一段が三六〇平方歩から二五〇平方歩になり再び三六〇平方歩になったことを示唆する記載があり、これが大化改新との関係で何時のことなのか、昭和三十年代から「田積三遷」として大論争になった。段が二五〇平方歩となれば、歩は高麗尺の六尺しか考えられず、高麗尺がますます注目を浴びたのである。そうなると、桛斎の見解は無視される。

しかし、この大論争も現在ではほぼ終息している。金沢悦男氏が平成五年に「田積田租法の変遷」に関する研究史をまとめた結果によれば、この古記の問答は、昭和三十六年に虎尾俊哉氏が発表した卓見すなわち「仮想問答」に過ぎなかったことにほぼ決着したのである。

そもそも令集解は令の解説書である。したがって、この古記の問答が、和銅格による「歩の五尺から六尺への変更」の解説にあったことは疑いない。その視点で読めば、その問答の趣旨は、「和銅格を読んで、平方歩の面積が一・四四倍となったと誤解し、一段が三六〇平方歩からいったん二五〇平方歩になり、そして更に現在の三六〇平方歩に戻ったと思う者がいるかも知れないが、和銅格の前も後も現在も、歩の長さは変わらない」ということなのである。そうであれば、一段二五〇平方歩の制度は実在したものではなくなり、桛斎の名誉は自動的に回復されなければならない。

しかし、高麗尺があまりにも歴史や考古学研究者の間で広まり、現在では日本ばかりでなく朝鮮半島でも遺跡図面に高麗尺を当てはめて見ては、高麗尺で設計されたとする報告が相次いでいて、あたかも定説かのようになってしまった。

桛斎は唐大尺の一・二倍の令大尺すなわち高麗尺について、積極的に否定したわけではないが、高麗尺の否定なくしては、桛斎の名誉回復は十分にできない。だから、次の項で、高麗尺の虚構性を述べる。

(二十七)まぼろしの高麗尺

高麗尺という名前は中国や朝鮮を含めて史書のどこにも出ていない。あるのは、既に述べた令集解の「和銅格の仮想問答」の回答中にある高麗法とか高麗術という用語のみである。

その内容を見ると、まず「令が五尺を歩としているの

は高麗法であり、土地を測るのが便利のためで尺を長大に作っている」とあり、更に「段を二五〇平方歩とするのは高麗術であり、高麗の五尺は今の大六尺になる」とある。計算すればすぐ判るが、段が二五〇平方歩であるためには、その歩は令大尺(高麗尺)の六尺でなければならない。しかし、どこにも六尺の記述がない。そしてその後に「だから格で歩六尺とした」と続くのである。

いずれにしても難解であるが、虎尾俊哉氏はこれを次のように解いたのである。

天平という一時点に於いて、『和銅六年の改定によって高麗尺六尺一歩制、従って二五〇歩一段制が採用され、その後いつか再び三六〇歩一段制となって天平時代に至った』という、一時点に於ける一つの誤解が存した、乃至そのおそれがあった。

いうなれば、「想定問答」の記述の中に高麗法とか高麗術という用語が出てくるだけなのである。したがって、段二五〇平方歩の制度も仮想のものに過ぎなくなり、令前に存在していた制度と見なすことはできない。

ところが、この仮想問答に登場した段二五〇平方歩制が、令前の代制に結び付けられてしまった。令前の代制では一段が五十代(束代)であったことに階調していたからである。その説が有力化したのは、他に令前の代制を説明する方法がなかったからでもある。

さて、一段五十代と高麗尺による一段二五〇平方歩制を対比すると代は五平方歩である。対応関係はあるけれど完全とは言えない。だから、錚々たる歴史学者たちが、五平方歩を基本単位とすることに違和感を感じていた。

内田銀蔵氏は代の法が歩を基定として起った徴証はないとして、高麗尺説を斥け、凡そ稲一束を得べき田積を一代としたにすぎないと論じた。これに対して坂本太郎氏も「初め稲一束を得べき地は一代と言われたろう」と一定の理解を示し、弥永貞三氏も「その最も小さな単位は、一定の長さを一辺とする正方形として表現されると考える方が常識的ではなかろうか。……再考の余地があるのではないか」と述べている。

岸俊男氏も代制の方格地割を論じる中で、高麗尺の五歩が先にあったとするのは順序が逆であると、弥永貞三氏の考えに同調している。

更に亀田隆之氏は、一段二五〇歩制の出てくる「今足勘文」は慶雲三年格(七〇六)に則って書かれていながら、当の慶雲格には二五〇歩の記載がないことから、高麗尺の五歩を起源とする説に強い疑問を投げかけている。その後も、虎尾俊哉氏や吉田孝氏などの有力な研究者が同様な意見を出している。

その上、高麗尺の六尺は二一四センチメートルにも達していて、とうてい従来の歩(歩幅二歩)の概念には合わないことも大きな問題であった。

このように、懐疑的な意見が多いなかで、高麗尺が準

定説の地位を得たのは、何と言っても藤田元春氏の『尺度綜考』によってである。昭和四年に出版されたこの著書が出版文化賞を得て、歴史考古学研究者の尺度に関するバイブルとなってしまったことが不幸であった。

この著書は、歴史研究者には受けが良かったが、計量史の専門家の間では極めて評判の悪いものであった。例えば、計量史の先達で、物理学者としても著名だった天野清氏は『尺度綜考』を「確たる根拠もない昔の尺度の寸法を五桁目まで並べ…まことしやかに書いたり……幼稚な記述があるのも驚くに足りない」と痛烈に批判しているし、同じく計量史研究の第一人者で著書も多い小泉袈裟勝氏も「とうてい科学的な考証に耐えるものでなく、かの狩谷棭斎の著述からも大量に引用しているが、結果に置いて棭斎の科学性からはるかに後退したものとなっている」と述べている。

しかし、小川琢治氏や内藤湖南氏の序文を得た『尺度綜考』で述べられた高麗尺の影響は大きかった。同書で藤田元春氏が高麗尺の根拠としたのは、次の項目である。

① 中国の東魏尺が高麗尺に一致。
② 四天王寺の現存建物に高麗尺を検出。
③ 法隆寺の建物が高麗尺に一致。
④ 山田寺、川原寺、比曽寺、毛原寺、高宮寺の柱間等が高麗尺に一致。
⑤ 難波京の地割や韓国慶州の地割が高麗尺に一致。

これだけ多くの証拠があるのだから、歴史研究者が高麗尺に信を置いたのも当然であろう。しかし、これらの全てが現在では、まったくその証拠能力を失ってしまっているのである。

まず東魏尺は『隋書律歴志』の記載に誤記があり、正しくは『宋史律歴志』が示す唐大尺と同等尺と判明した。また、四天王寺の場合は発掘調査の結果、現存の建物とは全く異なった柱間であったし、奈良の各寺院の柱間も発掘調査によるものではなかったので全く信頼できる数値では無かった。

その中で、唯一の証拠能力を持ったのが法隆寺の建物であるが、これも精密な解析の結果、高麗尺の四分の三の長さがモジュールであり、古韓尺に一致することがわかり、根拠とならなくなった。難波京や慶州の地割も想定と全く異なっていたことが発掘調査によって明らかにされている。

このような状況にもかかわらず、高麗尺が延命していたのは、その後の研究者たちが、遺跡や遺物に高麗尺を当てはめて見ては、高麗尺に合う事例を増やし続けているからである。尺度の当てはめには「そう思って見るとそう思えてしまう」怖さがある。

この誤りを明らかにしなければならない。それが私のライフワークであり、まず『まぼろしの古代尺―高麗尺

はなかった―』を吉川弘文館から上梓した。これは本格的な議論ではなかったが、出版社が副題として「高麗尺はなかった」と付けてくれたことで、それなりの効果があった。しかし、それでは不十分で、学術的な検討によって、高麗尺検出の事例を全て再検討してその虚構性をあきらかにしたのが、平成十七年の『朝鮮学報』に載せた論文「日韓古代遺跡における高麗尺検出事例に対する批判的検討」である。

桜斎が知りえなかったことを現代の学者は知っていながら、狩谷桜斎の業績を軽視した。だから私は、桜斎の知りえなかったことを基にして、桜斎の名誉を回復し、新たな研究に結び付けなければならないと思っているのである。

いつの間にか、狩谷桜斎讃歌のはずが、自己讃歌に変わってしまったかも知れない。しかしもう少し続けたい。それは、桜斎に導かれて、古韓尺という尺度を発見し、更には古代の日韓の土地制度が同じであり、古墳築造でも同じ計量系が用いられていたという壮大な構想である。

ここで項を改める。

狩谷棭斎讃歌（九）

新井宏

（二十八）古韓尺の登場

江戸後期の狩谷棭斎は、現代の遺跡資料について何も知ることなく『本朝度量権衡攷』を著した。昭和の藤田元春氏は、不十分とは言え棭斎の知りえなかった情報も利用して『尺度綜考』を著して、結果において誤った。

私は、棭斎はもとより、藤田元春氏よりも、更に更に多くの情報を参照できる環境にいる。だから藤田元春氏の誤謬を修正するだけでなく、棭斎の業績を更に発展させなければならない。それは、大化前代の土地制度や古墳の尺度を解明することである。

そもそも私が、このような研究にのめり込むようになったきっかけは、昭和三十六年に末永雅雄氏が美しい天皇陵の測量図や航空写真を『日本の古墳』に発表したことにあった。それによって昭和四十年代には「古墳の尺度論」が一斉に巻き起こっていたのである。

考古学の専門家ばかりでなくアマチュアの研究者も加わり、測量図をもとにして、あれこれと試案を発表していた。しかし、まさに百家争鳴の状況であり、議論が収斂するきざしは全くなかった。

統計学を知る私の方が合理的な議論ができる。その当時、コンピュータを活用できるのも、私くらいであった。

そう誤解したのが始まりであった。しかし手ごわかった。着想は良かったが、古墳の大きさが規則正しく出来ていると思ったのが、そもそも間違いであった。無数にある古墳のどれを対象にするかも恣意的であってはならない。

いくら試行錯誤して解析して見ても満足行く結果は得られない。結局、一日も早く自説を発表したいと思いながらも、すっかり行き詰まってしまった。余暇を見つけ

ては全国の古墳の計測図面を集め続けていたが、四十歳代のサラリーマンが自分だけの時間を持ち続けることは難しく、いつのまにか情熱も醒めてしまった。

それからちょうど十年近くたった昭和五十八年のことであった。仕事上の責任を取る形で選手交代する時期がやって来た。そして「失意」が求めたのが、歴史や考古学への回帰であった。そこで出会ったのが、かの有名な「法隆寺再建・非再建論争」である。

明治三十八年に始まり、大正・昭和と延々と続いたこの大論争は、結局、昭和十四年の若草伽藍の発掘によって、再建論に決着したが、非再建論の有力な根拠が、「法隆寺が高麗尺で造られている」と言う点にあった。もし再建なら唐大尺を使っているはずなのに、現存する法隆寺の建物は、高麗尺の方がはるかに良く一致していたのである。

しかし、奇妙なのである。高麗尺が唐大尺よりもよく合うのは一応は事実としても、それよりも更に正確にあうモジュールがある。それが、後に私によって名付けられた古韓尺である。古墳の築造も、もしかしたらこの古韓尺によっているのではないだろうか。それは高麗尺の積極的な否定につながる。

そして、夢中になって、飛鳥期や白鳳期の寺院や宮殿の発掘調査を渉猟し、更には、朝鮮半島の古墳や寺院、宮殿についても調べ、中国まで手を伸ばした。確かな手ごたえがあり、ますますのめり込んで行ったが、その頃、仕事の方も再び順調に回転し始めていた。

いつのまにか五十路に入り、いわば働き盛り、時間の余裕があるはずがなかった。朝早く起きて時間を作り出すしかなかったが、その中で三篇の論文を書き終えて、それをもとにして『まぼろしの古代尺』という研究書を脱稿したのが平成四年のことである。

何とか、著名な出版社から出したい。

人生にはつきがある。いままでも随分ついていた人生であった。しかしこの時ほどつきを感じたことはなかった。編集者がかって高麗尺に疑問をもった経験のある方で、とにかく出版を検討してくれるという。吉川弘文館と言えば、専門の学者でさえそこから本を出せば勲章になる出版社である。定説にもなっていないアマチュアの研究書など余程のことがなければ引き受けるはずがなかったのが『まぼろしの古代尺―高麗尺はなかった―』として出版されたのである。大満足であつた。

（二十九）韓国国立慶尚大学通い

出版が終わってしまえば一段落と思っていたのが大間違いであった。背伸びをし過ぎてしまった。いたるところに美しい誤解が満ちていた。そのことにはまず自分で

気がつき次に読者が教えてくれた。自分ではこれしかないと思った論理も冷静になれば、別の見方もあった。晴れがましい本を開くのが恐いと思う日もやって来た。しかし基本的な間違いではない。何とかしてもっと自論を強化したい。世の中にはそんな資料が必ずあるはずだ。

それと、もうひとつ理由があった。もっと専門家たちが注目してくれると思ったのに、総じて反応は冷ややかであった。たしかに、著名な歴史考古学者の坂詰秀一氏や鈴木靖民氏などが賛意を表してくれたが、他は「アマチュアの説などにうっかり乗って怪我でもしたら」という雰囲気であった。正面から反論されることはなかったが、伝統的な方法、すなわち「無視」が続いていた。

また再びデータや文献との格闘がはじまった。突破口があるはずだ。それを求めて毎朝五時には起きだして机に向う日々が続いた。段々深みにはまり、朝鮮半島の中世から近世にかけての計量史や土地制度史の研究、それに中国の土地制度研究史にまで手をひろげるようになった。

その結果生まれたのが、中国・朝鮮半島・日本にまたがる壮大な土地制度史の構想であった。主観的には個々の構想を繋ぎ合わせれば、自然に出来上がる構想であるが、他人に説明するには直接的な証拠を見付けなければならない。そのミッシングリンクは朝鮮半島に必ずあるはずだ。

韓国に行きたい。

そんな姿を見ていた妻が言ってくれた。……早く会社を卒業して、韓国に行っていらっしゃい……。この一言が決定的であった。

平成十二年、会社卒業と同時に始めた韓国国立慶尚大学での生活は、学生達との交流だけでもいくつかの物語になる。しかも、古韓尺の検証問題に限定しても、慶州の新羅南山新城碑や出雲風土記に文献的な証拠を見出し、慶州の新羅王京の造営が『三国史記』『三国遺事』の記録により古韓尺で行われたことを解明し、それらを相次いで韓国語の論文として発表できた。

目的の達成はここまででもほぼ十分であった。

(三十) 代制の起源の解明

しかし、何と言っても最大の物語は、朝鮮半島の古い土地制度にあった。「結負制」を研究している最中に、大変なことを発見したことである。

結論だけを言えば、朝鮮半島にあった「結負制」を復元した結果、古韓尺の三歩を「量田歩」とする「結」「束」「把」と言う土地面積の単位が用いられていたことが判明したのである。量田歩の百歩が一里であり、里四方が「井」であるから、十把が一束、千束が一結、十結が一井という十進法の体系であった。したがって、一束

は古韓尺三歩の「量田歩」の四・八〇メートルを一辺とする正方形の面積と定義され、計算すると二十三・一平方メートルとなる。

これは大変なことを意味した。日本における大化前代の土地制度「代制」の「代」の面積が二十三・一平方メートルであり、これと完全に一致したのである。しかも、日本の「代」が「束代」の略称であったことも判明し、更には、束代の下の単位も「把代」で、朝鮮半島の単位「束・把」と完全に一致したのである。

面積が一致し、単位の名称まで一致したとなれば、もう間違いが無い。その上、束・把の単位は中国には存在せず、日本と朝鮮半島のみで使われた名称である。更に言えば、束は韓国語でタバルと発音し、言語学的にも、日本の束の発音タバは朝鮮半島からもたらされたと考えられるのである。

かくして、日本の大化前代の土地制度「代制」が朝鮮半島の「結負制」と全く同一のものであったことが判った。その基本単位は古韓尺による歩と量田歩である。そうであるならば、その土地単位系は古墳時代まで遡り、大型前方後円墳などにも使われていたのではないか。

（三十一）古墳尺度研究への回帰

かくして、筆者のながい彷徨は最初の古墳研究に回帰することになった。幸いなことに、古墳に関する発掘などの実証的な研究もその間に大きく進んでいて、信頼性の高いデータが増えていた。

そこで早速発見したのが群馬県下の前方後円墳に関する研究成果である。群馬県は、太田天神山古墳をはじめとして保渡田古墳群など周濠を持つ大型前方後円墳がたくさんある有数の古墳地域であるが、発掘によって均整のとれた復元図が多く提出されている。尺度研究には絶好である。たまたま妻が保渡田に疎開していたことも何かの縁だったに違いない。

そればかりではなかった。この地方の古墳研究を牽引してきた梅沢重昭氏が既に次のように述べているではないか。

> 墳丘・周堀の築造にあたって使用された基準尺度（モジュール）は、墳丘や周堀各部の計測値に包含されているものと考えられ、その公約数値から帰納すれば、（晋尺）二十尺＝四・八〇mであろうと推定している……この基準尺度は、一尋＝一・六〇メートルとした場合の三尋＝四・八〇メートルする可能性もある……

ここで尋を古韓歩と読み替え、（晋尺）二十尺を量田歩と読み替えれば、朝鮮半島の結負制の基準尺を述べたの

とまったく同一の内容になる。

梅沢氏の数字の当てはめは、古韓尺にとっても完璧なのである。ただし、梅沢氏の見解は、同時期の中国の「晋尺」が用いられたとするもので、この点が間違っていた。

一見すると合理的な「晋尺説」ではあるが、東アジアでは土地を測るのは「歩」であり、「尺」をそのまま使うことは決してなく、しかも晋尺の実長を二十四・〇センチとするのも誤りで、正しくは二十四・三センチである。古韓尺なら何の問題もない。

そうであるならば、奈良や河内にある巨大な前方後円墳はどうであろうか。

早速再検討した結果も、実に嬉しいものであった。古墳の墳丘長を対象にしてみると、最大長の仁徳天皇陵は四百八十メートルで量田歩の百歩すなわち古韓尺のちょうど一里である。履中陵や造山古墳は量田歩の七十五歩、箸墓古墳、景行陵、土師ニサンザイ古墳、作山古墳、仲津媛陵は量田歩の六十歩、崇神陵、仲哀陵、室宮山古墳は量田歩の五十歩である。このように、上位十位圏の超大型前方後円墳がほとんど全て量田歩によって綺麗に説明されるのである。

そして、収集し続けてきた古墳形状図、特に発掘調査によって復元図の得られている各地の五十基余りの古墳についても手を拡げてみたが、ほとんど例外がない。

ここでやや気張って、成果を考古学誌としては最も権威のある『考古学雑誌』に載せたのが平成十六年である。それを読売新聞が大きく取り上げてくれた。

残った課題は、東アジア古代史における古韓尺の位置づけである。中国との関係を無視して、朝鮮半島と日本だけの視点で議論していてはもちろん不十分である。

中国の『禮記』によれば、周代には「八尺一歩制」が行われていた。周尺の実長は約二十センチ。そうすると周代の一歩は一・六〇メートルである。それは「六尺一歩制」の古韓尺の一歩一・六〇メートルと完全に一致している。中国では秦の始皇帝の頃から「六尺一歩制」を採用するが、その制に見かけだけ合わせたのが古韓尺の源流に違いない。

この一致は、古韓尺の研究が中国の古代土地制度にも光を与える成果でもあり、平成十七年に開かれた北京に於ける科学史国際学会で発表した。

やっと終わった。

長い長い道程であったが、その間、常に狩谷棭斎によって導かれていた。私が『狩谷棭斎讃歌』を著したい気持ちがお判りいただけるであろう。

しかしながら、つきはそんなことでは終わらなかった。

(三十二) 古韓尺の新たな展開

そのひとつは江田船山古墳の銀象嵌太刀から古韓尺が出てきたことである。この有名な鉄剣には「用大鉄釜并四尺廷刀」と書かれているが、その太刀の復元長が百七センチと判明した。計算すれば二十六・八センチで古韓尺にぴったりである。今年（平成二十二年）発刊の史遊会の『歴史のみち草』にそのことを紹介したばかりである。

出雲風土記からも、またまた古韓尺がでてきた。出雲風土記には、意宇郡宍道郷の石ノ宮神宮にある二つの猪像岩とひとつの犬像岩について、周長、高さ、長さが記載されているが、実測結果と対比してみると、ほぼ完全に古韓尺と一致したのである。

そもそも、出雲風土記は里程記事で埋め尽くされた書物で、そこには郡と郷の間の距離などが十三里六十四歩とか五里八十六歩とか異常に詳しく書かれている。郷の中心がどこにあるのかも判らない中で「歩」の単位まで示すのはどう考えても不自然であるが、これらを古韓尺の十五里とか六里から換算された数値と見ると完全に納得できるのである。換算比率は〇・八八一であった。

そして、極めつけのニュースが本稿を執筆中に飛び込んできた。昨年（平成二十一年）末に、奈良県の纒向遺跡から大型建物群が発掘されたのである。

纒向は古墳時代の発祥地ともいうべき場所であり、そこから「尺度」を議論できる建物群が見つかったのであるから興奮した。周辺には最古の前方後円墳である纒向古墳群がある。

早速、報告書を取り寄せて検討すると、古韓尺にどんピシャリなのである。しかも、漢尺や魏尺では全く合わない。この「漢尺」が全く合わないという明白な事実がうれしかった。古墳が漢尺で造られたとする試論が、考古学の専門家からも、雨後の筍のように後を絶たなかったが、これでやっと根絶できる。

桜斎の導きで完全試合が目前である。

狩谷棭斎讃歌（十）

新井宏

（三十二）永眠

本稿「狩谷棭斎讃歌」は、異例ではあろうが、棭斎の永眠のことから書きはじめた。稿を締めるにあたり再掲する。

狩谷棭斎は天保六年（一八三五）閏七月四日、浅草伝法院前の津軽屋新宅で永眠した。

前月の十日以来、食事が採れなかった。死の前日に棭斎を見舞った松崎慊堂は「万無一生、而精神如平日、言石経校文・淳化帖事数語、亦如平日、向晩握手而別、暗泣三声、余亦腸断」と『慊堂日暦』に記す。簡潔な漢文は、男の悲悼を適く表現する。六十一歳であった。

若干補足する。

『慊堂日暦』によれば、村山月汀から棭斎が重病との知らせを受けたのは、前々月の二十三日である。その時食味はあったが、翌月の十日には既に食事が採れなくなり、月末には訃報を待つだけとなっていた。そのような「万無一生」の中、しかも死の前日に「精神は平日の如く、石経の校文・淳化帖の事を云う数語も平日の如く」であったというのである。そして「暗泣三声、余亦腸断」と慊堂は記す。私はこれほどの深い表現を知らない。

最後の会話に出てくる「石経」とは、その頃慊堂が刊行を企画していた『縮刻唐石経』のことであり、棭斎も大いに期待していた。

また「淳化帖」とは、宋の太宗が淳化三年（九九二）に編集させた最古の法帖（書道の手本）『淳化閣帖』のことである。名筆家としても知られていた棭斎は、その翻刻本・校訂本の善本『淳化祖帖』をやっと捜し求め、版刻することを計画していた。そこには王羲之などの名墨蹟

などが数多く納められている。

梅斎は死の前月「今や余病めり、その就るを見るに及ばざらん。聊か為に其の顛末を発す」と、その跋を書いている。これが梅斎の絶筆となった。その跋は梅斎の弟子の小島成斎が清書して五年後の刊行に際して巻頭に載せられる。小島成斎は後に福山藩の祐筆を勤め、老中阿部正弘のもとで、ロシアや米国への外交答書を書いたことで知られている名書家である。

梅斎の法名は常関院実事求是居士である。「実事求是」の名は梅斎が生前に定めておいたものという。まさに実事求是の一生であった。

梅斎の死は数えで六十一歳。私は既に七十二歳である。江戸期最大の実証学者梅斎を追いかけながら、そこに自らを重ねてはヒントを得て学んできた。もちろん、梅斎の広範な分野にわたる実績に較べようもないが、特定な部分のみに注目すれば、その比較を通して語りたいことが多くある。

梅斎は職業的な学者でも教育者でもなかった。先学や親友達から多くを学んだが、特定の師を持たなかった。それと同時に、職業的な形で弟子を持つこともなかった。それにもかかわらず、梅斎には良い弟子が群がっていた。松崎慊堂にも優れた弟子が集まり、その後の新しい日本を背負う人材を輩出したが、慊堂は昌平黌の重鎮であり、掛川藩の教授であったことから、後の羽村山荘も教育所としての性格を持っていた。

しかし、梅斎の場合は学識のみで弟子が集まっていたのであって、派を成し閥を作ることはなかった。

私のように独歩の研究をしている者にとって、職業的な研究者、すなわち大学の先生達に羨ましさを感じることがある。それは卒論などで学生達に研究を分担させて指導する過程で、研究面での後継者を自動的に養成できることである。その結果として、研究がますます細分化され矮小化される欠点もあるが、なによりも一度高めた水準を維持できる利点が大きい。

現代の歴史学界で計量史のバイブルとみなされている藤田元春の『尺度総考』は、梅斎の『本朝度量権衡考』から多くの資料を引きながら、実証という基本面では梅斎からはるかに後退してしまった。不幸だったのは、梅斎のもとに多くの人材が集まりながら、計量史の分野での後継者が居なかったことである。

それでも幸いだったのは弟子達が未刊の著書を後に刊行したことである。藤田元春はそこから資料を引いたのみで、学問的な姿勢を学ばなかった。しかし私は、梅斎からその学問に対する姿勢を含めて計量史を学んだ。

私淑とは、孟子の言葉で、直接に教えは受けないが、私(ひそ)かにその人を師と考えて尊敬し、模範として淑(よし)とするこ

とだと言う。私は間違いなく椀斎に私淑していた。

もちろん今日では私のように椀斎に私淑している研究者も多いに違いない。日記を残さなかった椀斎について、九百字詰めで九百ページにも及ぶ詳細極まる『狩谷椀斎年譜』を出版した梅谷文夫などは、その最たる者であり、ある意味で現代の奇蹟でもある。椀斎の評伝を志し果たせなかった森鴎外も、史伝三部作『渋江抽斎』『伊澤蘭軒』『北条霞亭』を通して、椀斎について詳細に書いている。『古京遺文』を絶賛した藪田嘉一郎も私淑者のひとりであろう。

このように、現代に至るまで、私淑する者の絶えない椀斎であれば、その当時の著名な学者、市野迷庵、山梨稲川、松崎慊堂、伊澤蘭軒、近藤正斎、管茶山、太田南畝などとの親交によって、彼らに与えた影響も極めて大きかったのは当然のことであろう。友を見ればそれだけでも人柄がわかる。本稿でも不十分ではあるが、「讃歌」のつもりで交友関係について紹介してきた。

しかし、椀斎の人柄を彷彿させる話は、他にも多くある。本稿を締めるにあたって、いくつか書き留めておきたい。

(三十三) 椀斎の子女

既に紹介したが、椀斎の二女の多加(後に俊)は、辛口の人物評で知られた椀斎の弟子岡本況斎でさえ「たか子といふは、椀翁のいつきむすめにして、ざえかしこく、なまなまのはかせは爪くはる」とその学識を高く評価している。森鴎外によれば、多加は今清少納言と云われ、その仮名文字の美しさは歎賞すべきだったという。

椀斎がその多加に宛てた書簡が残っている。三村竹清の「椀斎華牋」に納められているものであるが、管見ながら研究者に引用されている例を知らない。したがって専門家の解説もなく、心もとないのであるが、鴎外によれば、多加は黒田家の奥に三年ほど仕えていたので、おそらくその時期のものであろう。

内容は、多加が着物の着様や髪の結様が上手く行かないとうったえる手紙に対して、椀斎はいろいろな「帯地さん留」を挙げて、その手配を承知したと伝えるものであるが、私が感心したのは、対等な目線で綴る椀斎の文章である。

「御ふみ拝見いたし候」で始まり、「……御めもじいさい申上まいらすべく候、御返事まで、早々かしこ……おたかどの御もとへ、椀さい」と結んでいる文章は、とても親から子に宛てた様式とは思えない。

もっとも、江戸期の親子間の書簡形式に疎いので、それは単なるフォーマット文に過ぎないのかも知れないが、「其方夜分御酒の節さびしく御座候よし、此方は酒なしに御座候……」などとあると、これは全く対等の目線で

ある。

以下も鴎外によるが、多加は椀斎のもとに集まる書生たちにまじり、常に酒を飲んで快談をしていたという。また「盤安さんがわたくしを女房に持ってくれないかしら」と言って伊澤蘭軒の次男、一書生の柏軒に嫁するが、四十九歳で亡くなった時、柏軒は「己がお目見をしたお蔭で、酒を飲みすぎて死期を早めた」と言ったという。

多加の死の二ヶ月前に、柏軒は秩禄と役料を合わせて四百俵に出世し、将軍家定にお目見している。「客に酒を供する毎に、献酬の間善く飲み善く談じた」からだと言う。

そのことを知って、多加への書簡を読むと、ますます椀斎の多加に対する愛情を感じる。

多加は間違いなく時代を先取りした女性であった。しかしそれは椀斎が愛娘を対等な人格として育てたからである。早死にした妻善(よし)への想いであったのかも知れない。

なお前に、鴎外の『伊澤蘭軒』に基づいて、多加が伊澤柏軒と結婚したのは天保六年の春としたが、『慊堂日暦』を読むと、天保七年二月の項に「椀斎の季女は対を求むること甚だ急なり」とあるので、多加二十八歳の時の誤りのようである。結婚の背景には津軽屋の困窮があったのも確かであろう。

さて、多加について触れたので、長男の懐之(ちかゆき)についても書いておきたい。

松崎慊堂は椀斎の墓碣銘の中で懐之について「風度気象能肖父」としている。父に似ているというのであるから、通常ならほめ言葉であるが、その他の記述がないことから、懐之が学問の人ではなかったとする見解が一般的である。すなわち、椀斎の学識は多加に伝わり、懐之は凡庸だったと云う評価なのである。

鴎外も懐之について「たとえ多少書を読んでいたとしても、必ずしも大商店を経営する力をば有うせなかったものと推する」と厳しい。

その評価は、椀斎の死後、津軽屋が破産の危機を招き、椀斎所蔵の貴重な古典籍を手放してしまったことにもよっているであろう。しかし事実は異なっていたというのが梅谷文夫の見解である。

本稿の冒頭で述べたように、津軽屋は椀斎の死の一ヶ月後の八月七日に、津軽藩に対して金十二万七五六九両の巨額債権を放棄している。これは、椀斎の死の直後に、藩財政の窮迫を理由に五ヵ年間返済を中止するとの通告を受けたことがきっかけとなり、懐之みずから決断して申し出たことである。その頃、津軽藩は江戸藩邸焼失や将軍家位牌所の普請など、不時の出費に加え、天保の恒常的な冷害に悩んでいた。もはや一時しのぎの借り換えで問題を先送りできる状況ではなかった。

ちょうど椀斎の亡くなった月、天保六年(一八三五)閏

七月、薩摩藩の島津斉興（なりおき）は調所広郷を起用し、鴻池などに対して巨額の借金の踏み倒しに成功している。

その内容は、「五百万両の借金返済は元金だけの二百五十年分割払い」という凄まじいものであった。この頃、薩摩藩では全収入を充てても金利支払いに不足していた。完済できるわけがないのは、借り手よりも貸し手の方がむしろ良く承知していたので、このような無法が通ってしまったのである。

米代金の過半が米問屋などへの利払いに消えてしまう事情は諸藩とも大同小異であった。こうなると、借金をしている側が強い。津軽屋は藩に対する最大の債権者であると同時に、藩の庇護なしには立ち行かない立場にあった。全ての債権を放棄して藩財政を再建する必要があったのは、藩ばかりでなく津軽屋の立場でもあった。

おそらく薩摩藩の借金の踏み倒し事件を米問屋仲間から聞いて、懐之は決断したのだと思う。これは身上大事の凡庸の者に成し得る話ではない。

しかし、その後の展開は藩にとっても津軽屋にとってもまことに不幸であった。翌天保七年（一八三六）は、「天保の大飢饉」であり、寒冷地の津軽藩は致命的な被害をうけ、さらに冷害の余波は天保十年まで続いた。津軽屋は藩に代って借り受けた借金の返済に追われ、飯料にも欠くほど困窮した。しかしついに暖簾を守り通し、家業の再建に成功したのである。

その中で行われた古典籍の処分であってみれば、懐之を責めるのは酷であろう。淡々と述べる梅谷文夫でさえ「心に不孝を詫びながら、父の遺愛の古典籍の売却に踏み切った事情を察すべきである」と述べている。

（三十四）国学者との交流

椛斎は儒学を泉豊州に学んだ後に、国学を村田春海や屋代弘賢から学んだ。その後の研究対象も国学は主要なフィールドであった。したがって、歴史人名辞典では「国学者」と紹介している場合もある。しかし、椛斎は優れた漢学者、儒学者であり、それにも増して考証学者であり、それはむしろ国学者の対極に位置する学問分野でもあった。

国学の中でも、思想的に最右翼に立ったのが本居宣長であり、宣長没後の門人を自称した平田篤胤であった。宣長には優れて実証的な側面もあったが、その本質は紛れもなく観念的な世界であり、それは平田篤胤を経て、明治維新以降の天皇制理念のバックボーンとなった。

大和魂という日本人にとって「心地よい理論」に合わせて、全てを体系化して行く作業は、一見、学問的なように見えて、実は最も反学問的な過程であった。科学の本質は、実証データに基づき、「美しい理論」を乗り越えて、その上にまた新しい「美しい理論」を作るところに

ある。

先に観念的な「美しい理論」を導いておいて、そこに後から事実をちりばめて行く手法は、自己陶酔的で壮大な理論体系を形成しやすいが、それゆえにこそ自戒しなければならない。

考古学の世界がそうである。全国各地の大型前方後円墳の三角縁神獣鏡分有関係を基にして、小林行雄が纏め上げた壮大な古代国家体制論は魅力的であればあるほど、新たな事実を素直に受け容れることを困難にしてしまい、その後の恣意的な解釈を横行させる温床となっている。職業的な研究者は、定説に依存して論文を書いているので、それに縛られて、簡単に説を変えることができないのである。

また、少しムキになってしまった。

ここで紹介したいのは桜斎が平田篤胤との間で、八咫鏡をめぐって論争したことである。

今、手元に桜斎手稿の『本朝度考八咫鏡説平田氏批攷辨』というコピーがある。大分前に畏友岩田重雄氏(前の計量史学会会長)から、「尺座をめぐる人たち」と云う論考の付属資料として頂いたものであるが、そこには平田篤胤が「ものさし」の国家管理のために「尺座(ものさしざ)」を作ろうとしていたことが詳細に述べられていて、それはそれで興味深いのであるが、わたくしにとっては、何と言っても桜斎と篤胤の間に交わされた論争が面白い。

それは八咫鏡の解釈をめぐる論争である。桜斎はある時『本朝度量衡権攷』の稿を平田篤胤に見せたようで、それに対して平田篤胤が異論を唱えたらしい。それに対して再び桜斎が『平田氏批攷辨』を書いて反論しているのであるが、『本朝度量衡権攷』の冒頭にもほぼ同じ内容がかなりのスペースをとって載せられている。

要は、桜斎が西土の制を受けて日本の度量衡が始まったとするのに対して、篤胤は天皇の祖神の御丈がその始まりであるとするなど全く噛み合わない思想がその背景にある。したがって、多くを紹介しても意味がないが、本居宣長が『古事記伝』において八股蛇(やまたのおろち)を八頭蛇、八咫烏を八頭烏、八咫鏡を八頭鏡で八稜鏡のこととしたのに対して、桜斎が「八」は単に「多い」の意味、「アタ」は大指と中指をひろげた長さの意味であり、「八咫の鏡」は大きな鏡の意味するとして反論したことに、篤胤が再反論したのである。

感心するのは桜斎の再々反論の論証部分である。そこには逐一実に膨大な反証をつけているのである。そして「かく弁ずるは、本より事を実にして是を求めんと思えのみ……」と結ぶのである。要は、「実事求是」のためであり、篤胤の人格をも否定するような攻撃的な批判から自分の体面をまもるためではないことを明記しているのである。

このようなところに梼斎の矜恃の一端を見ると梅谷文夫も述べている。

ついでに「八咫鏡」について今日の話題を紹介しておこう。梼斎も『本朝度量権衡攷』の中で述べているように伊勢神宮の御神体「八咫鏡」を納める器は御樋代と云われ、延喜式などの記録によれば、その内径は一尺六寸三分(四十九センチメートル)である。ところで、福岡県の平原弥生古墳からは直径四十六・八センチメートルの同型の内行花文鏡が五面出土している。中国には全く見られない超大型鏡であり国産鏡というのが定説であるが、「八咫鏡」もこれと同型かも知れないのである。それは大きさと文様の類似性である。

残念ながら、いま現在、八咫鏡を見ることはできないが、神道五部書の一つである『御鎮座伝記』によると「八頭花崎八葉形也」とあり、八葉の内区を持つ平原の内行花文鏡と文様は矛盾しないのである。

このことが確かであれば、日本の古代史の理解に多大な影響を及ぼすのは間違いないであろう。しかし、私の生きている内には、天皇陵の発掘と同じく、その答えを期待できないであろう。

しかし、ひとつのチャンスがある。それは旧満州国皇帝の溥儀に日本の皇室が贈った「三種の神器」のレプリカが存在しているとのニュースが一度流れたことがあるからである。虚報であったのか、あるいは報道を規制されたのか、その後の消息を見出せずにいる。

大分、寄り道をしてしまった。国学者との交際に戻る。

梼斎から多大な影響を受けたのは彼の親友や弟子達ばかりではなかった。伊勢外宮の権禰宜で国学者の足代弘訓(あしろひろのり)もそのひとりであった。

梼斎の三度目の西遊時に会っただけであるが、その頃三十六歳で「天狗」になっていた足代弘訓に、その固陋を悟らせたのが梼斎だというのである。弘訓は大塩平八郎とも親交があり、天保五年の冷害に際しては、山田の窮民を救うため津藩に掛け合い米千俵を得ている。その際に、梼斎から贈られた『貞観政要』の写本をお礼として津藩に納めている。

梼斎は、先輩格にあたる市野迷庵にしろ松崎慊堂にしろ、学問上、学風を変えてしまうほど多大な影響を与えている。足代弘訓がたった一度のふれ合いで、大きく悟ったのは、梼斎の学識によってであろうか、それとも人柄であったろうか。

もはや学問的には、相手にしなくとも良さそうな平田篤胤に向ってさえ、丁寧に丁寧に、例証を挙げて説明する梼斎の姿を見ると、そこには人柄を伴う梼斎の学識を見る想いがある。

(三十五)　梼斎の後継者達

梴斎が有名になったのは、むしろ明治以降のことである。市井の学者であり、しかも「実事求是」の学風は、国学・朱子学の盛行した江戸期にあっては時代に先行し過ぎていた。この点で、伊藤仁斎、荻生徂徠、賀茂真淵、本居宣長などの思想家とは大きく異なっていた。主要な著作も生前に刊行されたのはごく僅かであり、職業的な教育者のように多くの弟子を抱えることもなく、派をなし閥を作ることとも縁遠かった。

しかし、梴斎の学識と人柄に魅せられた周辺の人たちは、梴斎の遺作を暖め、明治になってから刊行し梴斎の名を高める。その背景には、梴斎らの開いた考証学がその後の国学や蘭学に影響をおよぼし、幕末における西洋の科学技術の到来を容易ならしめたことがあったと思う。

まず、未刊行であった『和名類聚抄箋注』が、梴斎の薫陶を受けた最後の弟子、森立之（枳園）によって明治十六年（一八八三）に出版される。その際には、渋江抽斎が梴斎の三稿を浄書したものが用いられた。森立之は『傷寒論』を書いた明治の考証医家の第一人者であり、今でも森立之研究会という団体が活動していると聞く。また渋江抽斎は森鴎外の名作史伝小説で世に残った。

次に活字となったのが明治二十六年（一八九三）の『古京遺文』と明治四十三年（一九一〇）の『上宮聖徳法王帝説』である。

しかし『本朝度量権衡攷』は、その学を継ぐ学者に恵まれなかったためか、大正五年（一九一六）の滝本誠一編『日本経済叢書』まで待たなければならなかった。もっとも、その他の著作の多くが『日本古典全集』に集録されたのはやっと昭和三年（一九二八）になってからであり、『度量権衡考』だけが遅れたわけではない。

梴斎に繋がる人脈には、伊澤柏軒、森立之、渋江抽斎などの他に、既に紹介した岡本況斎と小島成斎がいる。小島成斎は老中阿部正弘の祐筆で名書家として知られるが、梴斎も名書家であった。

梅谷文夫は『狩谷梴斎』の終りに、解説なしで年代不詳の書家番付表をそっと載せているが、それによれば梴斎は西の大関の巻菱湖（弘斎）に次いで関脇にランクされている。

（三十六）結

今回を以って連載を終える。

梴斎の伝記でもない。梴斎の研究書でもない。梴斎讃歌とは、私にとっては書き易いタイトルであったと思う。

当初は四回ほどの連載をイメージして書き始めた。書くにしたがって、梴斎讃歌のはずなのに、自己主張や自己讃歌がどんどん入り込み、三倍ほどのボリュームになってしまった。梴斎も苦笑していることであろう。まし

てや、多くの資料を引用させて頂いた梅谷文夫が読まれたらどう感じるであろうか。それを思うと、密かに書き溜めたラブレターを読まれてしまうような恥ずかしさを感じる。

いずれにしても、『まんじ』という「私的な世界」に甘えながら、その恥ずかしさをかなぐり捨てて書き続けてきて良かったと思う。お蔭でやっと二十年来の思いを遂げることができた。

この間に、いろいろとお教えいただいたことも多くある。その中には、貴重な資料もあるが、それらをどこかに挿入しようとすると構成がますます乱れてしまうので割愛してしまった場合もある。いずれ機会を見て、再稿を志すこともあるかも知れない。その際には、ぜひとも活用させていただくつもりである。

なお、参考文献については、既に手元に一覧表を持っている。しかし、リファレンスつきで引用文献として載せたいと思い惑う場合もあり、今回は「讃歌」ということで冗長さを避けて全て割愛する。

（完）

狩谷棭斎讃歌

平成 28 年 4 月 30 日発行

著者　新井宏(あらいひろし)

協賛　史遊会サロン